山口県埋蔵文化財調査報告　第184集

冷泉家北遺跡

（れいぜいけきた）

— 平成８年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告 —

１９９７

財団法人　山口県教育財団
山口県教育委員会

序

山口県では、恵まれた自然環境の中、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

財団法人　山口県教育財団と山口県教育委員会では、私たちの郷土山口を築いてきた先人の足跡を今に伝える地下に埋もれた歴史的遺産―遺跡―を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録に留めて後世に残すべく、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成８年度は、玖珂郡周東町大字祖生に所在する冷泉家北遺跡の発掘調査を実施し、室町時代を中心とした集落の跡を発見するとともに、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

本書は、その多くの発掘調査の成果をまとめた記録であり、広く文化財への認識や理解のため、また、学術研究の資料として活用されることを期待するものであります。

終わりに、発掘調査の実施にあたって御協力いただきました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成９年３月

財団法人　山口県教育財団　理事長　上野　孝明

山口県教育委員会　教育長　上野　孝明

例　　言

1．本書は県営ほ場整備事業に先だって平成８年に実施した冷泉家北遺跡（山口県玖珂郡周東町大字祖生）の発掘調査概要報告書である。

2．本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委託を受けて実施した調査と、文化庁国庫補助を得て山口県教育委員会が実施した調査の成果をあわせて報告するものである。

3．調査組織は次の通りである。

調査主体　財団法人山口県教育財団
　　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　財団法人山口県教育財団事務局指導主事　田中　敏夫
　　同　　西田　　宏
　　山口県埋蔵文化財センター文化財専門員　岩崎　仁志

4．調査に当たっては、山口県農林部耕地課、山口県岩国土地改良事務所、周東町農林整備課、周東町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5．本書の第１図は、国土地理院発行５万分の１地形図「岩国」を使用した。

6．本書が使用した方位は、国土座標（第３座標系）で示し、標高は海抜標高である。

7．本書に使用した土色の色調の表記は、Munsell 方式による。
農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」による。

8．図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

9．本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＢ：住居跡、建物跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：柱穴　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＸ：不明遺構

10．本書の実測図・写真の作成及び本文の執筆に当たっては、田中・西田・岩崎が共同で行い、岩崎が編集した。

目　　次

1　遺跡の位置と環境……1

2　調査の経緯と概要……3

3　Ⅰ・Ⅱ地区の遺構と遺物……9
　(1)建物跡 ……9
　(2)土坑・柱穴……10
　(3)溝……11
　(4)不明遺構……11
　(5)遺構に伴わない遺物……12

4　Ⅲ地区の遺構と遺物 ……13
　(1)建物跡……13
　(2)溝を伴う建物跡……15
　(3)土坑……19
　(4)溝……23
　(5)柱穴……26
　(6)遺構に伴わない遺物……28

5　まとめ ……29

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …１
第２図　調査区設定図 ……５
第３図　Ⅰ・Ⅱ地区遺構配置図 ……６
第４図　Ⅲ地区遺構配置図 ……７・８
第５図　ＳＢ１・２実測図 ……９
第６図　ＳＫ４・６・８実測図 ……10
第７図　Ⅰ地区出土遺物実測図 ……11
第８図　ＳＫ９実測図 ……11
第９図　Ⅱ地区出土遺物実測図 ……11
第10図　ＳＤ１実測図 ……12
第11図　不明遺構実測図 ……12
第12図　ＳＢ４・５実測図 ……13
第13図　溝を伴う建物跡(SB3･SD10)14
第14図　ＳＤ10遺物出土状況図 ……15
第15図　ＳＤ10出土遺物実測図 ……16
第16図　ＳＤ９実測図……17
第17図　ＳＤ９出土遺物実測図……17
第18図　溝を伴う建物跡実測図
(ＳＢ６・ＳＤ19・23・ＳＫ22・26)…18・19
第19図　ＳＫ22実測図……20
第20図　ＳＢ６周辺出土遺物実測図……20
第21図　Ⅲ地区土坑実測図……22
第22図　ＳＫ22・23・26出土遺物実測図……23
第23図　Ⅲ地区溝実測図……24
第24図　Ⅲ地区溝断面図……25
第25図　ＳＤ16･18出土遺物実測図 ……26
第26図　ＳＰ22･23･27実測図……26
第27図　ＳＰ22・23・27・79出土遺物実測図…27
第28図　Ⅲ地区遺構に伴わない遺物実測図……28
第29図　冷泉氏館跡周辺地形図……30

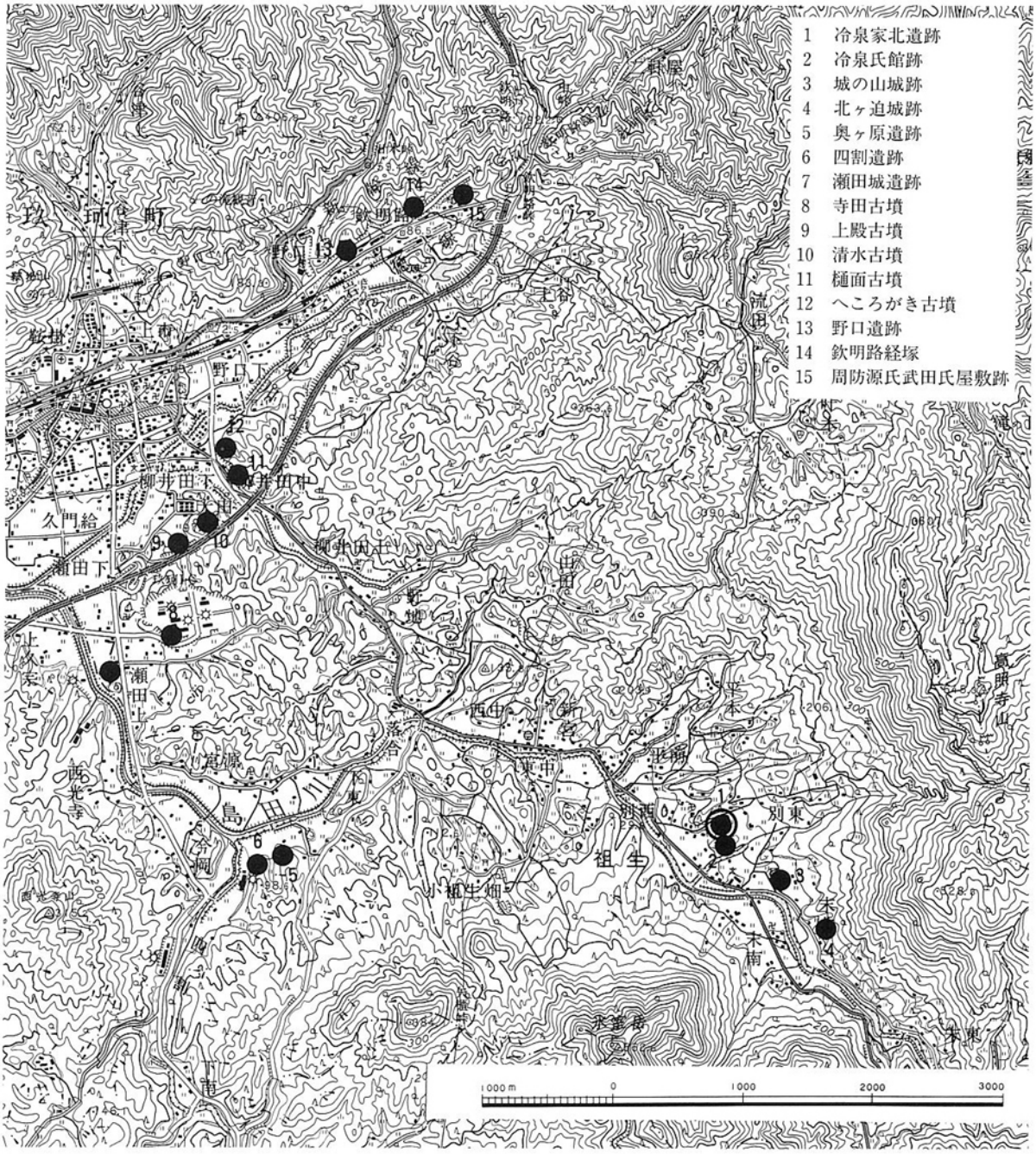
図版目次

図版第１　冷泉家北遺跡遠景（西から）
図版第２　冷泉家北遺跡近景（西から）　冷泉家北遺跡Ⅱ地区全景（北から）
図版第３　冷泉家北遺跡Ⅰ地区全景（南から）　冷泉家北遺跡Ⅲ地区全景（西から）
図版第４　ＳＢ３・ＳＤ10（西から）　ＳＢ３・ＳＤ10（北から）
図版第５　ＳＤ９・ＳＤ10およびＳＤ10遺物出土状況
図版第６　ＳＢ６・ＳＤ19（東から）　ＳＢ６・ＳＤ19（南から）
図版第７　ＳＫ22　ＳＤ９
図版第８　ＳＫ６　ＳＫ８
図版第９　ＳＫ19　ＳＤ14　ＳＫ13　ＳＫ16遺物出土状況
図版第10　ＳＰ27遺物出土状況　ＳＰ22遺物出土状況　ＳＤ14　ＳＰ23遺物出土状況
図版第11　出土遺物　①
図版第12　出土遺物　②
図版第13　出土遺物　③

1　遺跡の位置と環境

冷泉家北遺跡は、玖珂郡周東町大字祖生に所在する中世を中心とした集落跡である。

周東町は、山口県の東部の内陸に位置し、東は岩国市、西は徳山市、南は柳井市に隣接している。町内中央部をＪＲ岩徳線・国道２号線、及び山陽自動車道が東西を貫通している。さらに島田川中流域は国道437号線によって瀬戸内海沿岸と結ばれているという、すぐれた交通的位置にある。そのため、工業団地の整備も進み、将来、物流の拠点となる可能性が高い。島田川中流域にひらけた生産力にとむ内陸農村の形態を呈している氾濫性の玖珂盆地を中心に北部から東部にかけて標高600ｍ前後の山地がそびえ、西部から南部には比較的ゆるやかな傾斜の丘陵地が多い。町内の高森は古来交通の要所で江戸時代には本陣が置かれ宿場町として栄えた。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

冷泉家北遺跡は、周東町南東部、島田川上流域にひらけた祖生盆地の中央部（別東・別西地区）に位置し、標高645.3mのハンググライダーやパラグライダーの適地としても有名な高照寺山(上部は珪質片麻岩、中腹以下は花崗岩質岩石)の西麓にある。遺跡の西方約300mに、島田川が流れ、南方には、標高562.6mの氷室岳がそびえている。急傾斜の高照寺山からの流水は島田川までの短い距離を急激に流れ下る。そのため、特に高照寺山西麓には扇状地が発達している。扇状地内には、残丘が高照寺山山麓から西に向かって伸びている。低地は島田川に沿った狭い氾濫源のみである。冷泉家北遺跡は、この扇状地の扇央部付近から扇端部付近にかけてひろがっており、標高95mから111mの範囲である。この場所は、島田川の氾濫を避けることができ低地での耕作を行うために便利なところである反面、扇状地特有の土石流などの自然災害に対する注意が必要なところでもある。

遺跡に接して南側の残丘上には、室町時代の大内氏家臣冷泉判官隆豊の居館であった、冷泉氏館跡がある。残丘頂上部の館跡と思われる平坦地周辺には土塁・石垣・五輪塔などが残っている。また、館跡の西側には、館跡をとりまくように伸びる水田が存在している。この水田は、ホリバタとも呼ばれており、館の形態・規模等を知るための興味ある事実である。このことから、この地は少なくとも中世には人々の生活の場になっていたことがうかがえる。

さらに、遺跡の周辺には弥生時代から中世にかけての遺跡が点在している。最近になってこの付近の発掘調査が進み、次第に昔の様子が明らかになってきた。島田川流域を見てみると、冷泉家北遺跡の西約2kmの位置に弥生時代・古墳時代・中世の集落跡が発見された四割遺跡がある。四割遺跡は、祖生盆地の西、島田川と四割川との合流点近くに位置し、合流地点を見おろす舌状台地に発見され、弥生時代の竪穴住居や高床式倉庫の可能性もある掘立柱建物跡、弥生時代後期の甕が多数出土した。四割遺跡の約200m西方には古墳時代を中心とした集落跡が発見された奥ケ原遺跡がある。奥ケ原遺跡は、島田川が形成した谷底平野から比高にして5～6m高い山麓地に発見された遺跡である。島田川や島田川の支流である笹見川流域には古墳も多い。寺田古墳・上殿古墳・へころがき古墳等、数々の古墳が発見されている。また、祖生盆地の東端、島田川上流部の右岸の丘陵には、冷泉氏の一の家老木村勘七の居館と伝えられる城の山城跡と冷泉氏の二の家老尾高庄兵衛の居館と伝えられる北ケ迫城跡がある。

祖生盆地周辺の島田川流域丘陵地は、弥生時代以来、当時の人々がこの地に住居を構え生活を営み、島田川と強く係わりをもって生活をしていたことが納得できる場所である。しかも、島田川は瀬戸内海沿岸との交易の中枢をなしていたと思われる。

山口県教育委員会　未指定文化財総合調査報告書（史跡一中世一編）　1985
財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会　『奥ケ原遺跡』　1991
財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会　『四割遺跡』　1991
山口県埋蔵文化財センターニュース第8集　四割遺跡　1991
山口県教育会　『山口県百科事典』　1982
竹内理三　『山口県地名大辞典』　1988

2　調査の経緯と概要

山口県教育委員会では、農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、あらかじめ遺跡の分布調査を行い、確認された遺跡については現状保存を前提に山口県農林部耕地課と協議を行う。現状保存が難しい遺跡については記録保存を目的とした事前の調査を実施してきた。

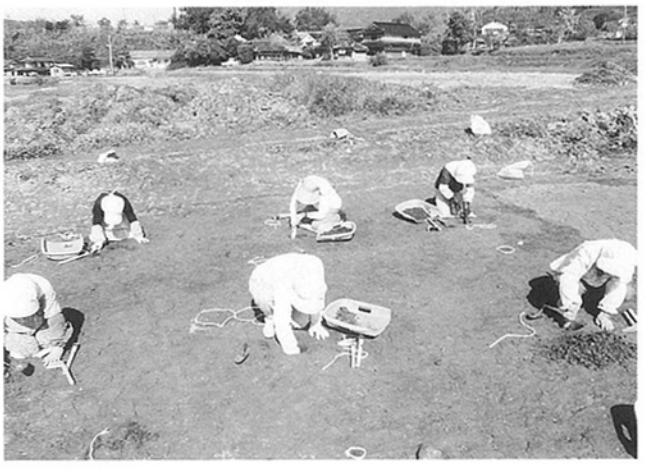
別東・別西地区（上祖生）における県営ほ場整備事業は平成８年度に施行予定されたため、平成７年12月に予察調査を実施した。その結果、対象地区内に文化財が眠っていることが判明した。そこで、予察調査の資料をもとに山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存が困難である3,000㎡について発掘調査することとなった。調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受け、両機関が合同で行うこととなった。

トレンチ掘り

平成８年９月17日から調査を開始した。はじめに、遺構面を確認するためのトレンチを設定し試掘した。まず、本年度耕作をしなかったⅠ・Ⅱ地区についてトレンチの掘り込みを行った。この地区は、高照寺山西麓から西に張り出した尾根とその北側に広がる扇状地が接する場所である。Ⅰ地区では３本のトレンチを設定した。遺構面は表面から20～70㎝で、高位部では浅く標高を減じるにしたがって深くなるという傾向が確認できた。Ⅱ地区では２本のトレンチを設定した。遺構面は表面から20～60㎝であった。Ⅰ・Ⅱ地区のトレンチの掘り込み中、土師器片・陶器片・スラグ・石鏃等が出土し、柱穴の存在も確認した。

表土除去作業

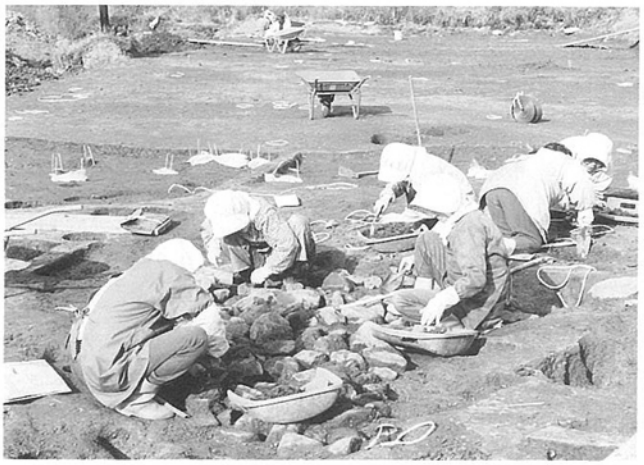
調査範囲における農作業の終了にともない、10月２日よりⅢ地区ににおいて10本のトレンチを設定し、トレンチの掘り込みを行った。Ⅲ地区は、扇状地の扇端付近に位置している。遺構面は表面から20～80㎝の所で、上位部で浅く下位部では深くなると



遺構掘り込み作業

いう傾向が確認できた。また、堆積層中に20～30cmの亜円礫を多量に含む場所もあり、その後の調査の困難さを予感させた。Ⅲ地区のトレンチの掘り込み中、土師器片・瓦質土器片・青磁片・スラグ等が出土し柱穴や溝状遺構の存在を確認した。10月７日から重機を使って遺構面直上まで表土除去を行った。多量の礫の堆積に苦労しながらも、無事作業は終了した。その間、調査面積の狭いⅡ地区の調査については、トレンチを手掘りで拡張しながら遺構検出を進めていった。10月15日、Ⅰ地区の遺構検出を開始した。遺構面上には礫層が広い範囲で堆積しており、検出作業は困難であった。高照寺山山項付近から飛び立つパラグライダーやハンググライダーを眺めながら作業を続けた。Ⅰ地区の遺構検出終了後、Ⅰ・Ⅱ地区の掘り込みを行い、10月31日、Ⅰ・Ⅱ地区について遺構の掘り込み作業を終了した。11月５日よりⅢ地区について遺構検出を行った。やはり礫層が広範囲に広がり、作業にはかなり時間がかかったが、12月３日、遺構の掘り込みを開始することができた。遺構や遺物の写真撮影・実測は、遺構の掘り込みと並行して行った。掘り込み中に出土した特色ある土器や遺構については、できるだけ作業の途中でも作業員の方々に集まっていただき説明する時間を設けるようにした。12月18日をもって遺構の掘り込みを終え、遺構面の清掃をした後、12月25日に空中撮影用のヘリコプターで遺跡の空中撮影を行った。その後、残った遺構の写真撮影・実測を進めた。まだ残暑の厳しい９月から雪が降る季節まで実施した現地における発掘調査も12月26日、作業員の方々をはじめ関係各位の多大な援助・協力により全て終了した。

今回の調査では６棟の掘立柱建物跡をはじめ、土坑や溝、多数の柱穴を確認した。特に、Ⅲ地区で検出された溝に囲まれた建物跡周辺からは、瓦質土器（鍋）をはじめ土師器片・陶器片・スラグ等が出土した。出土した土器は14～16世紀のものが多く、冷泉家北遺跡の性格を特徴づける事実と考える。

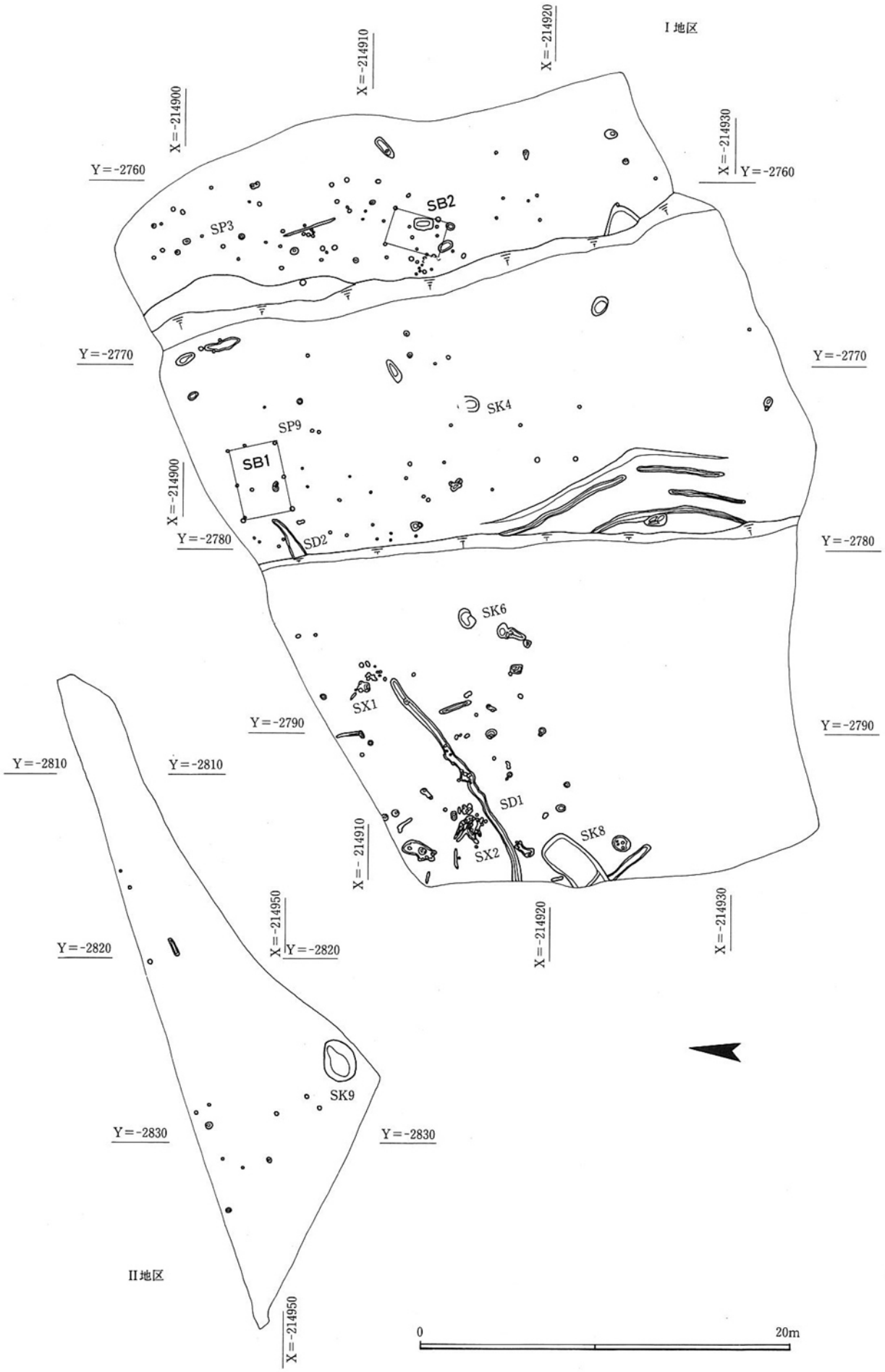


遺物検出作業

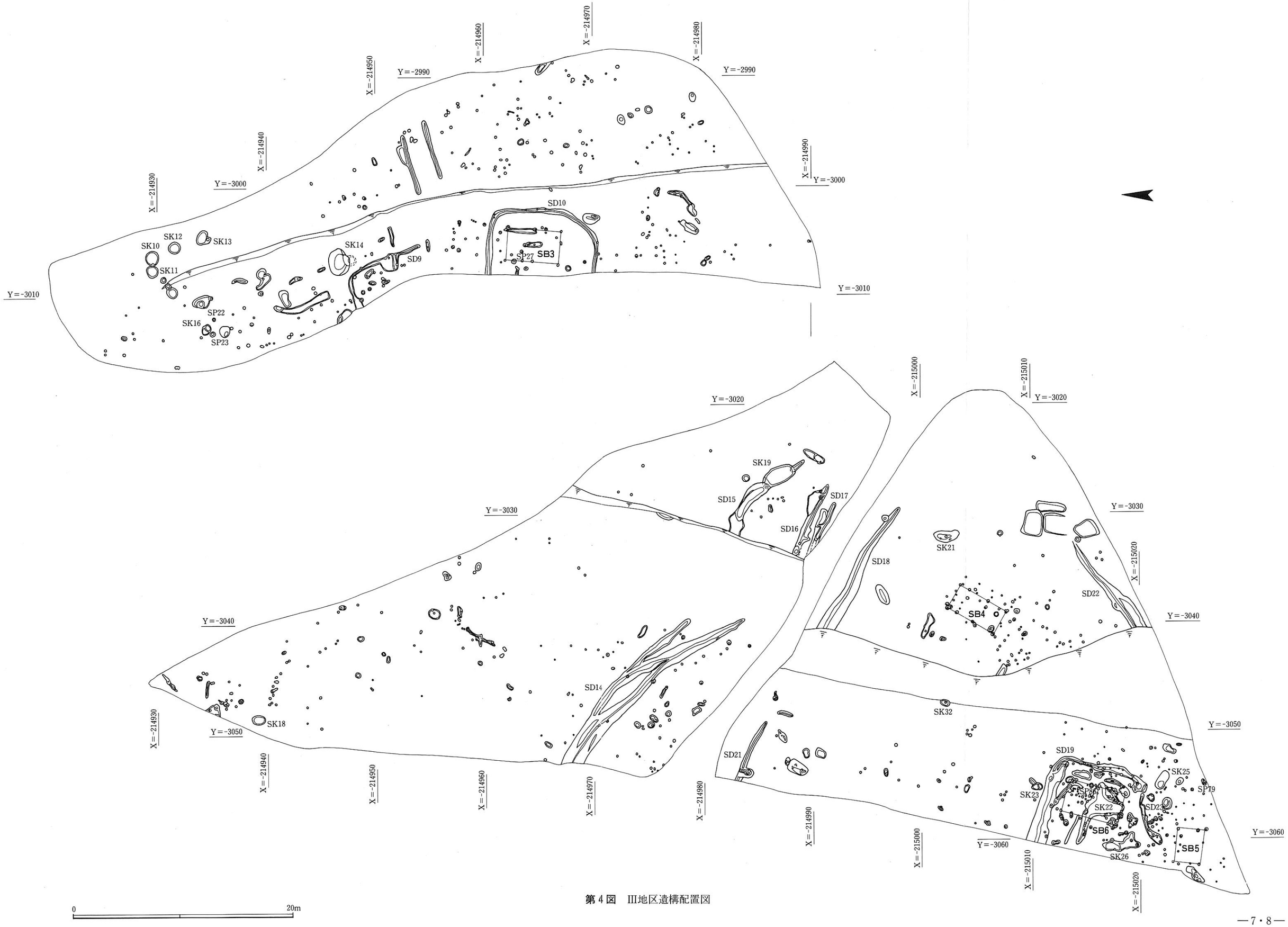
出土遺物説明会

調査区清掃作業

第2図　調査区設定図（2千分の1）



第3図　I・II地区遺構配置図



第４図　Ⅲ地区遺構配置図

3　Ⅰ・Ⅱ地区の遺構と遺物

Ⅰ地区は、冷泉家北遺跡で最も標高の高いところに位置し、東から西に張り出す尾根と北側に広がる扇状地と接した場所にあり南側は崖になっている。遺構面には東側から南側にかけて多量の亜円礫(20～30cm)が露出しており、幾度かの土石流がこの地を襲った可能性も考えられる。Ⅰ地区北西端で北西方向への緩やかな落ち込みも確認した。また、後世の削平を受けていることや土石流堆の存在によって、Ⅰ地区の遺構は主に中央より北側に展開している。Ⅰ地区から発見された遺構は、中世の掘立柱建物跡と思われるもの２棟、土坑８基、柱穴約200個、溝状遺構７条、不明遺構２基である。遺物については一部近世のものを含むが、全体としてみれば中世の土師器が大半を占める。

Ⅱ地区は、Ⅰ地区の南側に位置し、Ⅰ地区から伸びる尾根上にある。遺構面はほとんど平坦であるが、Ⅱ地区西端で落ち込みを見る。遺構の密度は希薄で遺物も少ない。発見された遺構は柱穴13個、土坑１個、不明遺構１基である。

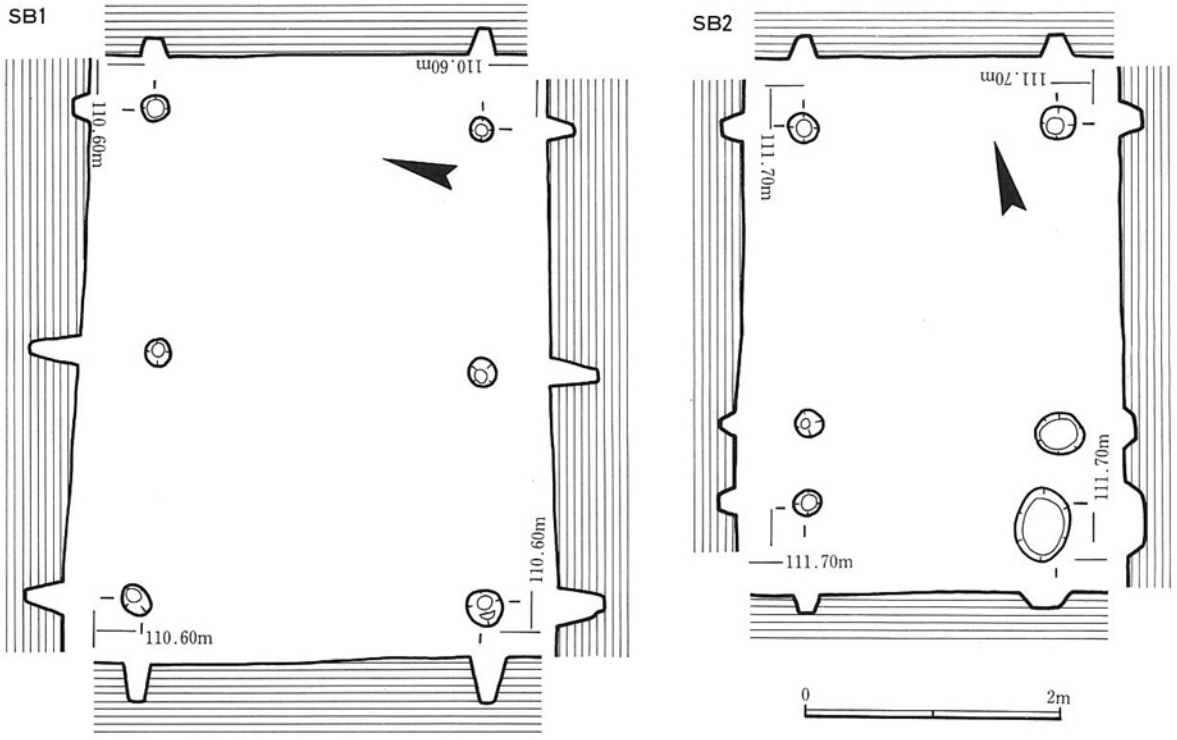
以下に、Ⅰ・Ⅱ地区の主要な遺構と遺物を紹介する。

(1)　建物跡

掘立柱建物跡はⅠ地区において２棟確認された。２棟とも棟の規模・方向から中世の掘立柱建物と考えられる。

ＳＢ１（第５図）

Ⅰ地区の中央部北側の位置に建てられた１間×２間の掘立柱建物。棟方向はＮ75°Ｅ。桁行長3.7ｍ、梁行長2.7ｍの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は直径18～30cm、深さ14～37cmである。柱穴からの出土遺物は水晶のチップ１個のみである。



第５図　ＳＢ１・２実測図

ＳＢ２（第５図）

Ｉ地区東側に位置する１間×１間の掘立柱建物跡と考えられる。棟方向はN16°Ｅ。桁行長2.8ｍ、梁行長２ｍの規模をもつ。柱穴は直径20～30cm、深さ13～17cm。柱穴からの遺物はなかった。

（２）　土坑・柱穴

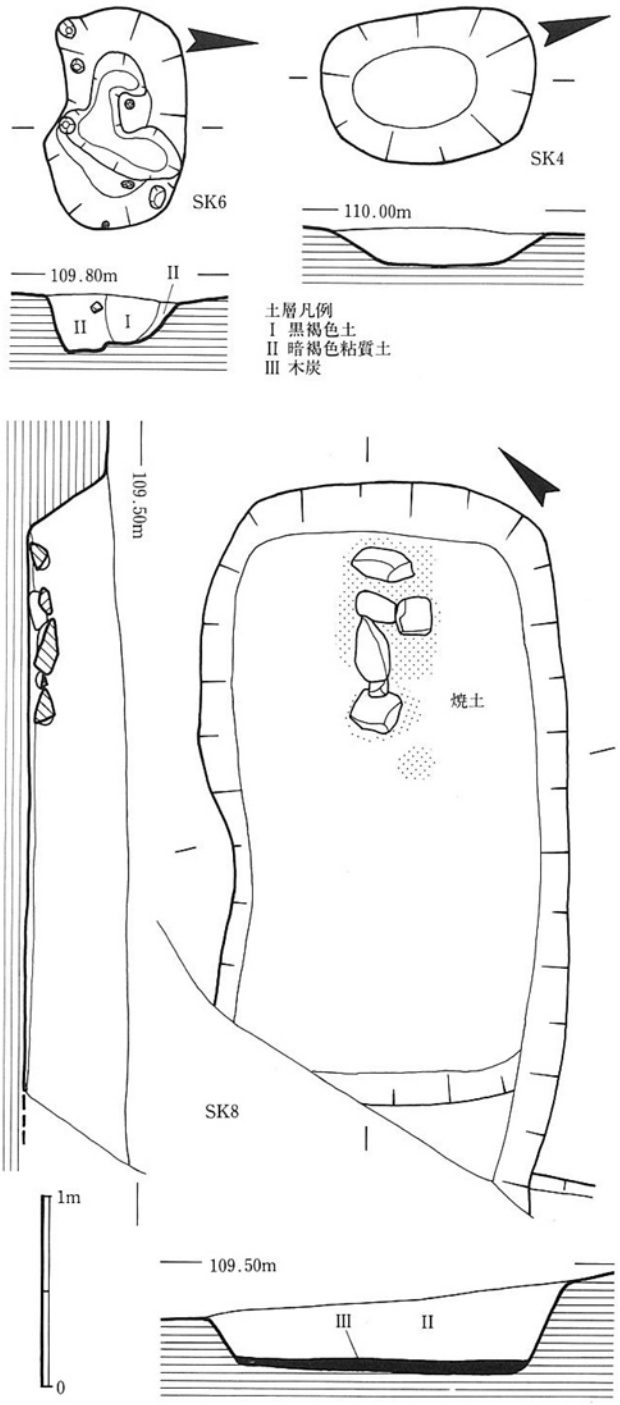
Ｉ・II地区で検出した土坑の大半は、後世の削平を受け底面部がわずかに残っているだけであり大半は時期や用途について不明である。柱穴も全体的に浅い。また、この地区の土坑・柱穴から出土する遺物は図化困難な破片が大半であり、図化できたのはＳＰ３から出土した土師器片１点のみである。第７図３はＳＰ３から出土した土師器の皿である。内外面には回転ナデ、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。

ＳＫ６（第６図　図版第８）

Ｉ地区の中央部やや南側に位置する。平面形はほぼ隅丸長方形、長軸は114cm、短軸は72cm、深さ30cmである。７個の柱穴が掘られている。埋土は黒褐色土と暗褐色粘質土の２層である。遺物は検出できなかった。時期や用途については不明である。

ＳＫ４（第６図）

Ｉ地区の中央部やや北側に位置する。平面形は長円形、長軸は112cm、短軸は82cmである。埋土は暗褐色土の単一層である。土師器片と木炭の細片が出土した。出土土器から16世紀に比定される。



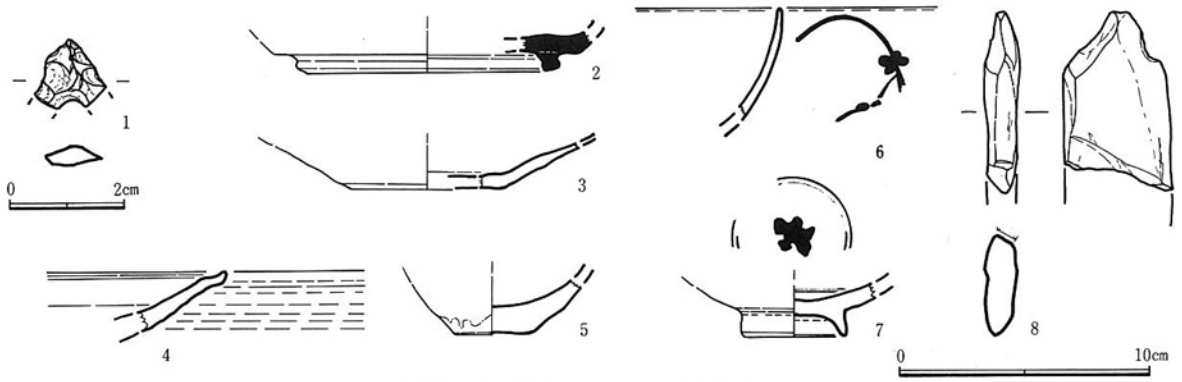
第６図　ＳＫ４・６・８実測図

ＳＫ８（第６図　図版第８）

Ｉ地区の西端に位置し、土坑の南西側は一部調査区によって切られている。平面形は隅丸長方形、320cm×170cmの規模である。断面形は皿状で深さは南東側で約45cm北西側で約30cm。埋土の堆積状況は二層に分かれる。下層には木炭、上層は黒褐色粘質土。北東側の底部には焼土が見られ、その上に粒径20～30cmの亜円礫の堆積が見られた。埋土から16世紀に比定できる土師器片が出土した。

ＳＫ９（第８図）

II地区の南側に位置しているこの地区唯一の土坑である。平面形は長軸が220cm、短軸が190cmの楕



第７図　Ⅰ地区出土遺物実測図

円形である。底部はほぼ平坦で深さは約30cmである。断面形は皿状である。南西側に柱穴が１つ掘られる。埋土は褐灰色粘質土の単一層で埋土中に木炭の細片が混入する。その他遺物の出土はない。

（３）　溝

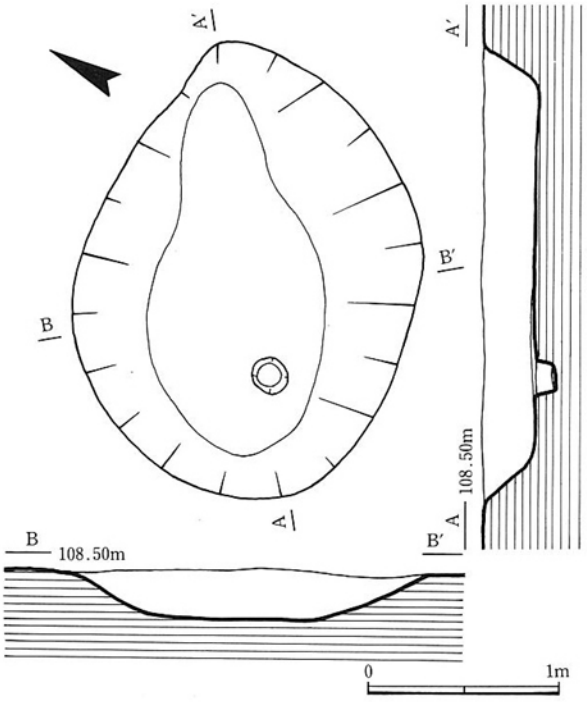
Ⅰ地区において検出した溝状遺構のほとんどは、後世の削平を受け底部がわずかに残っているものである。そのため遺物も少ない。

ＳＤ１（第10図）

Ⅰ地区北西側に位置し、北東から南西へ緩やかに流れる。残存する長さは約13ｍ、最大幅70cm、最深部でも10cmで浅い。溝中央部から北東端にかけて柱穴が多数掘られている。溝南西端は調査区によって切られる。溝の北東端は削平されて消滅している。埋土は暗褐色土で、出土遺物は14～15世紀に比定できる土師器片が出土した。

ＳＤ２

Ⅰ地区中央部北側に位置し、北東から南西へ緩やかに流れる。残存する長さは2.7ｍあまり、最大幅70cm、最深部12cmの規模をもつ。溝の西側が崖によって切られているが、埋土や位置等から判断するとＳＤ１と一連のものの可能性もある。埋土は暗褐色土の単一層で遺物の出土はない。

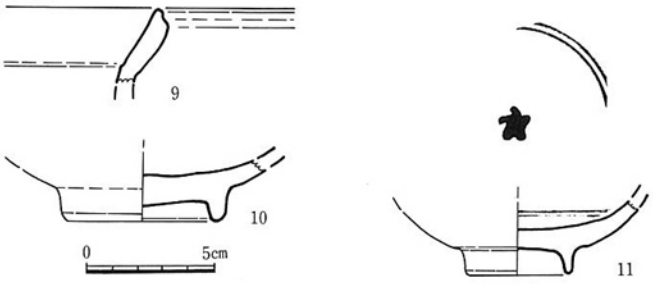


第８図　ＳＫ９実測図

（４）　不明遺構

ＳＸ１（第11図）

Ⅰ地区の北西側にあってＳＤ１に隣接している。柱穴状の遺構と細い溝状の遺構が集まったような平面形をしており、断面形は入り組んでいる。遺物はなく時期は不明。規模、形態から樹痕の可能性もある。



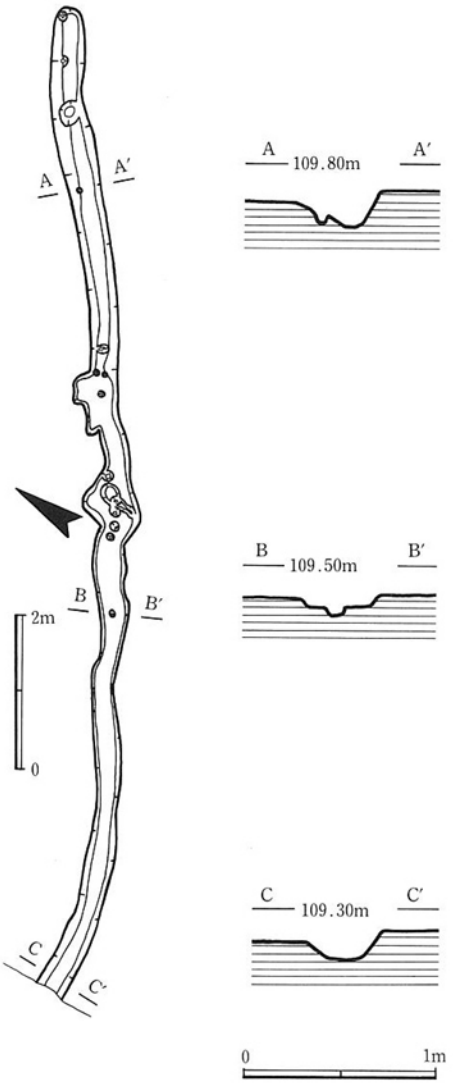
第９図　Ⅱ地区出土遺物実測図

ＳＸ２（第11図）

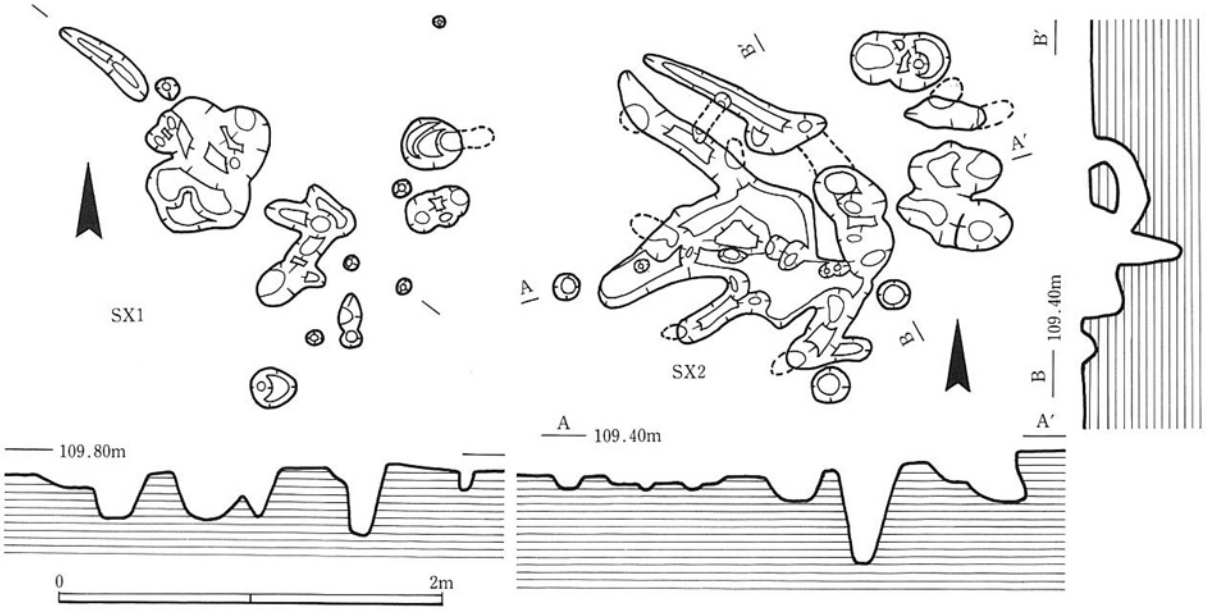
ＳＸ１の西側にあってＳＤ１に隣接している。平面形は不整形で断面形はいたるところでオーバーハングしている。ＳＸ２も規模、形態から樹痕の可能性がある。

（５）　遺構に伴わない遺物（第７図　第９図）

以下はⅠ・Ⅱ地区における遺物包含層中の遺物である。なお、第７図にはⅠ地区の遺物を、第９図にはⅡ地区の遺物を掲載した。１は打製石鏃である。安山岩を石材として用いている。２は須恵器の杯身の底部である。底部外面は高台貼り付け後ナデ、他はロクロナデ調整である。４は陶器の溝縁皿片である。内外面に灰白色の釉薬を施釉。調整は内面ミズビキ、外面ミズビキ・回転ヘラ削り。５は陶器の碗の底部である。内外面に灰オリーブ色の釉を施釉。調整は内外面にミズビキ、底部外面に回転糸切り痕。６は白磁の染付碗（伊万里焼)の口縁部である。白色釉が施釉され内面にミズビキ調整。７は染付碗の口縁部である。内外面に白色釉を施釉。調整は内面ミズビキ、外面ミズビキ・回転ヘラケズリ。見込みに五弁花くずれの印文がある。８は砥石である。緑色片岩を石材として用いている。９は土師器の鍋の口縁部である。内外面の調整は横ナデ。10は青磁の碗の底部である。外面は回転ヘラ削り。11は陶器の碗の底部である。見込みに五弁花くずれの印文がある。



第10図　ＳＤ１実測図



第11図　不明遺構実測図

4　Ⅲ地区の遺構と遺物

Ⅲ地区は、高照寺山の西麓から西に張り出した扇状地の扇端部にあり、冷泉氏館跡のある小丘陵ののの北側に位置する。遺構面の標高は95ｍ～99ｍで扇状地特有の緩傾斜をなしている。また、広い範囲で20cm～40cmの亜円礫が堆積しており、Ⅰ地区同様この地区にも幾度となく土石流が襲った可能性が考えられる。Ⅲ地区から発見された遺構は、中世の掘立柱建物跡と思われるもの４棟、土坑44基、溝状遺構22基、柱穴約700個である。また、掘立柱建物跡の中には、溝に囲まれた建物跡が２棟確認され、同様の溝の一部ではないかと思われるもの１条を検出した。遺物については、一部近世のものを含むが全体としてみれば中世の瓦質土器や土師器が大半を占めるが、スラグも数多く出土した。特に、溝に囲まれた建物跡周辺における遺物の出土が多い。

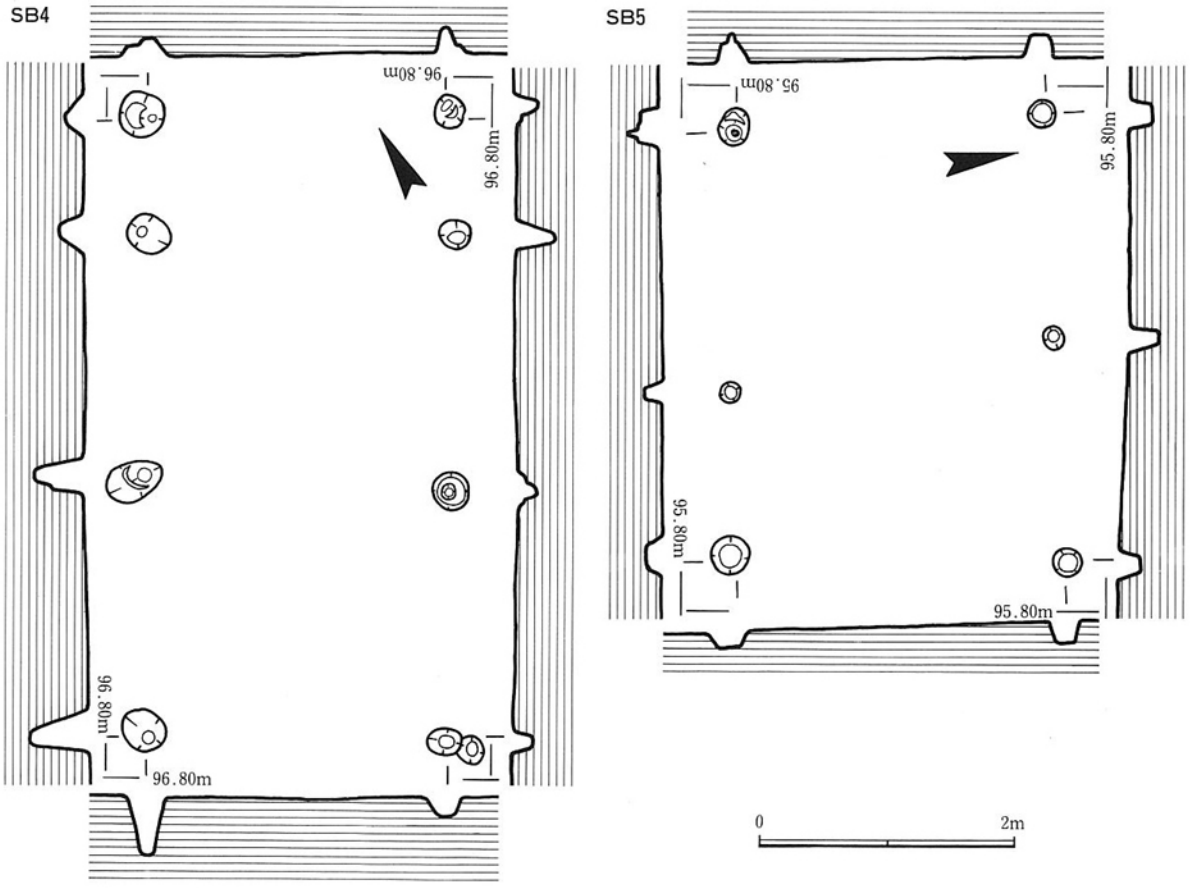
以下に、Ⅲ地区の主要な遺構と遺物を紹介する。

（１）　建物跡

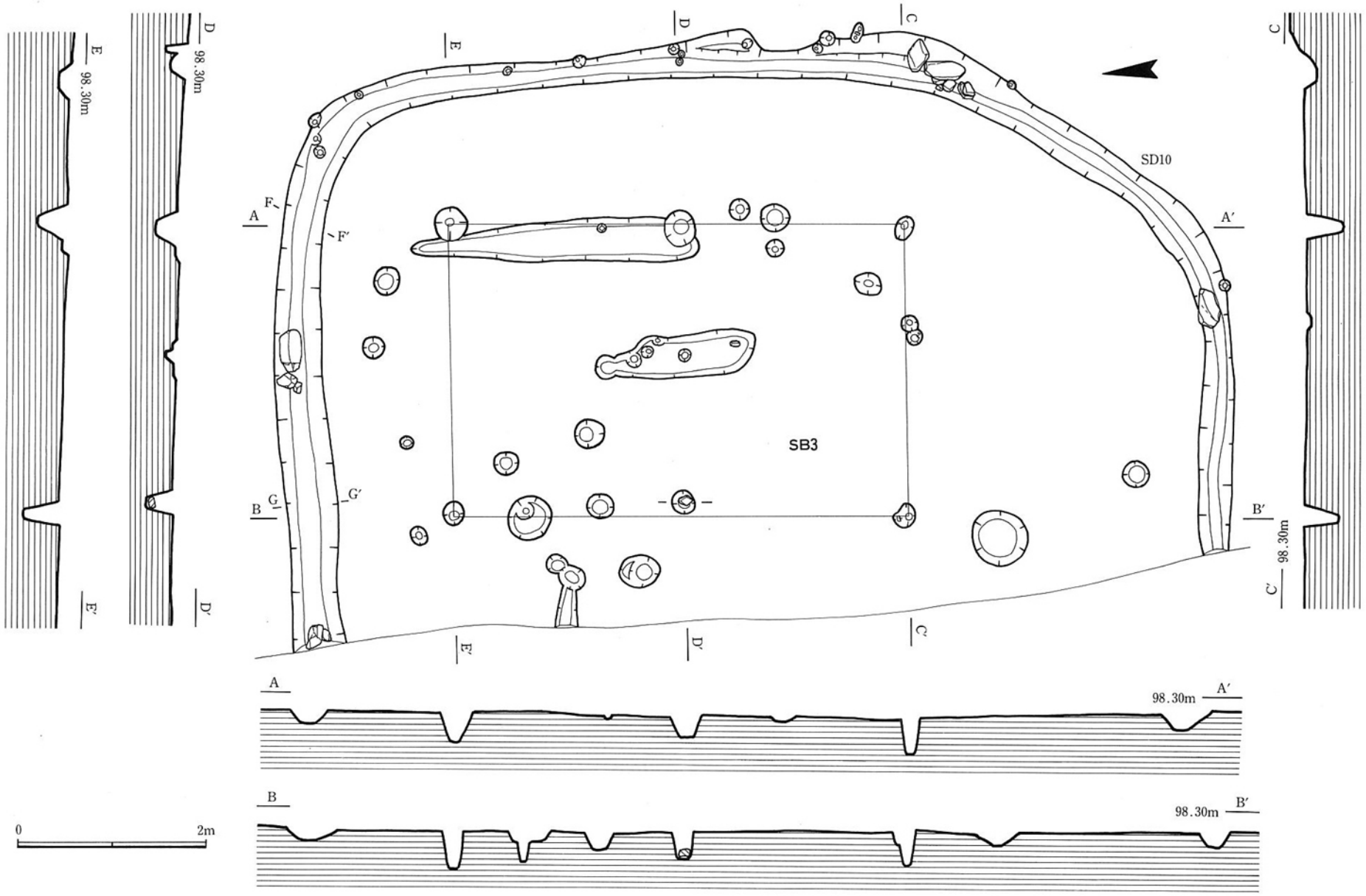
掘立柱建物跡はⅢ地区において４棟確認された。４棟とも土器・棟の規模・方向から中世の掘立柱建物と考えられる。ＳＢ３とＳＢ６は溝に囲まれている。

ＳＢ４（第12図）

Ⅲ地区の南側の位置に建てられた１間×２間の庇付きの掘立柱建物。棟方向はＮ30°Ｅ。桁行長4.8ｍ、



第12図　ＳＢ４・５実測図



第13図　溝を伴う建物跡（ＳＢ３・ＳＤ10）

梁行長2.4mの規模をもち、8本の柱で構成されている。柱穴は直径20～30cm、深さ15～47cm。柱穴から中世の土師器片が出土。

ＳＢ５（第12図）

Ⅲ地区の南西端に位置する１間×２間の掘立柱建物。棟方向はN85°W。桁行長3.5m、梁行長2.4mの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は直径15～30cm、深さ15～23cmである。柱穴からの遺物はなかった。

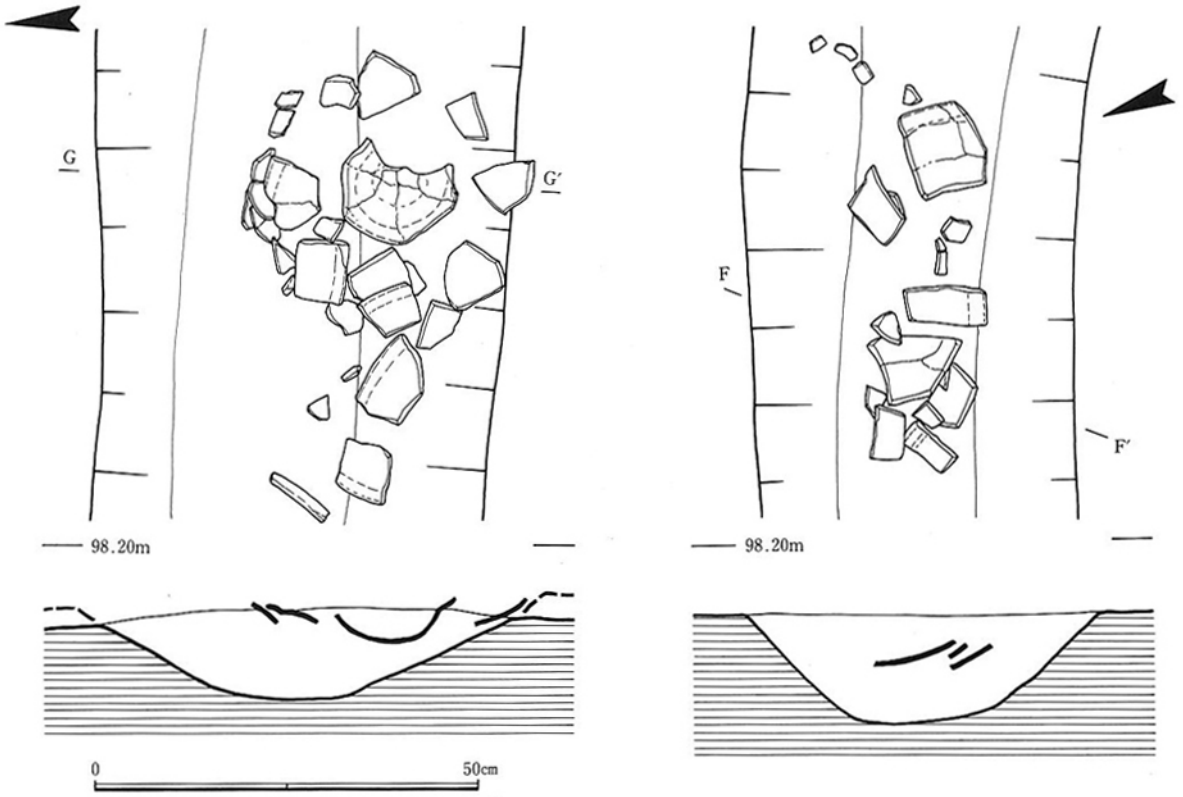
（２）　溝を伴う建物跡

Ⅲ地区では溝を伴う建物跡が３か所で発見された。溝と、溝で囲まれた範囲内にある建物跡の方向性が一致することから、両者は共存するものと判断できる。

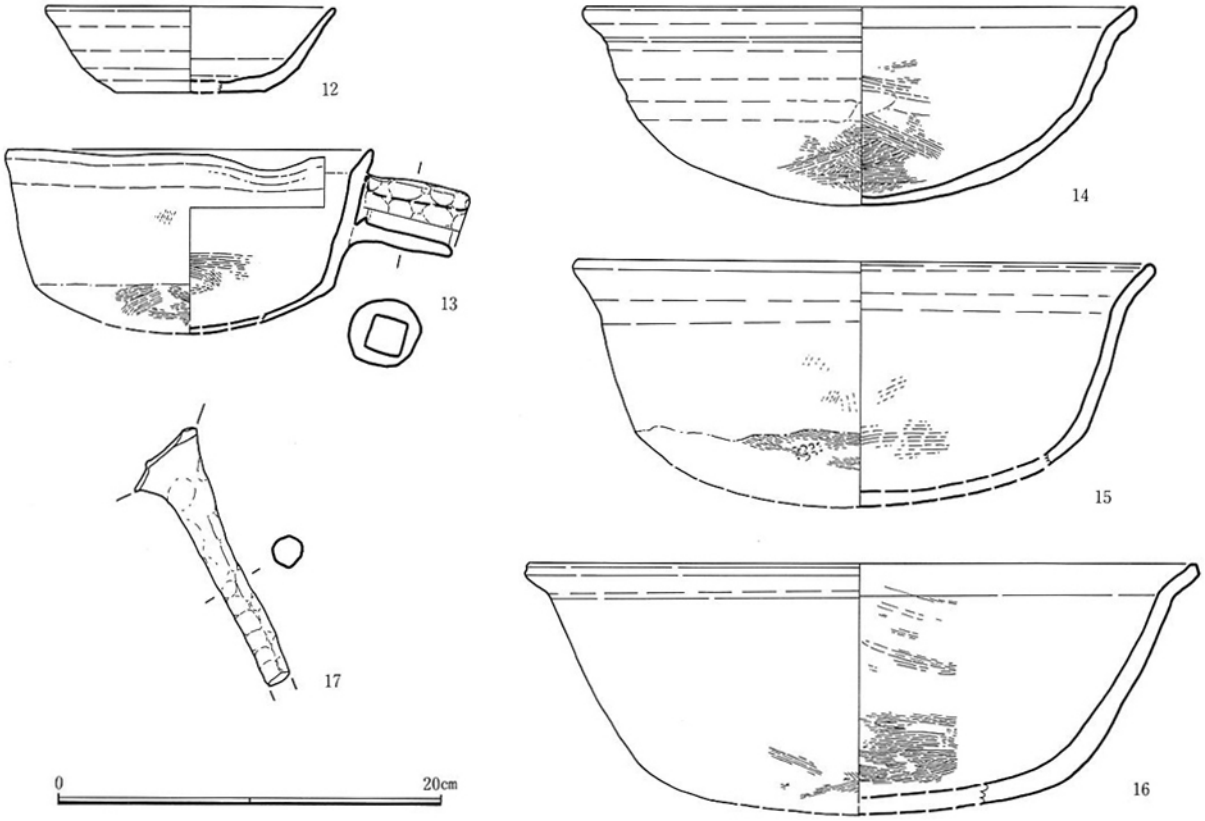
ＳＢ３およびＳＤ10（第13図）

ＳＢ３は溝に囲まれた１間×２間の掘立柱建物である。棟方向はＮ５°Ｅ、桁行長4.8m、梁行長3.1mであり、柱穴は比較的小型である。桁方向の柱間寸法は、北東隅の柱穴から南に2.4m＋2.4m、北西隅の柱穴から南に2.4m＋2.4mである。

ＳＤ10は建物の北・東・南を囲んでおり、検出部分の総延長は約18.5mである。西は水田開発に伴って掘削を受ける。溝によって囲まれる範囲は、南北9.2m、東西5.6m以上である。溝は幅0.3～0.6m、深さ0.15～0.3mであり、埋土は暗褐色土の単層である。溝の中には自然石および土器がみられる。出土遺物は瓦質土器の鍋が主体を成し、このほかに土師器杯・木炭などがある（第15図）。土器は数か



第14図　ＳＤ10遺物出土状況図



第15図　ＳＤ10出土遺物実測図

所から集中的に出土した(このうち２か所は第14図に示した)。遺物は溝埋土の上層に多く含まれており、溝の埋没時に一括投棄されたかのような状況である。14世紀後半ないし15世紀前半の遺物と考えられる。

第15図はＳＤ10出土の遺物である。12は土師器杯である。胎土は橙色で、底部には回転糸切りの痕跡を残す。

13は瓦質土器の鍋であり、把手と片口をもつ。焼成不良のため軟質である。筒状の把手は口縁部直下に貼り付けられる。把手の断面は外面が円形、内面が方形であり、外面には指頭痕を残す。この特徴から、把手は断面方形の棒に粘土を巻き付けて製作されたと考えられる。把手と片口の成す角度は約67°である。底部外面はハケによって調整され、叩きの痕跡は認められない。なお、脚はもたない。

14は瓦質土器の鍋であり、脚をもたない。内・外面ともにハケによって調整するが、外面の一部にはヘラ削りがみられる。底部外面には叩きの痕跡は認められない。

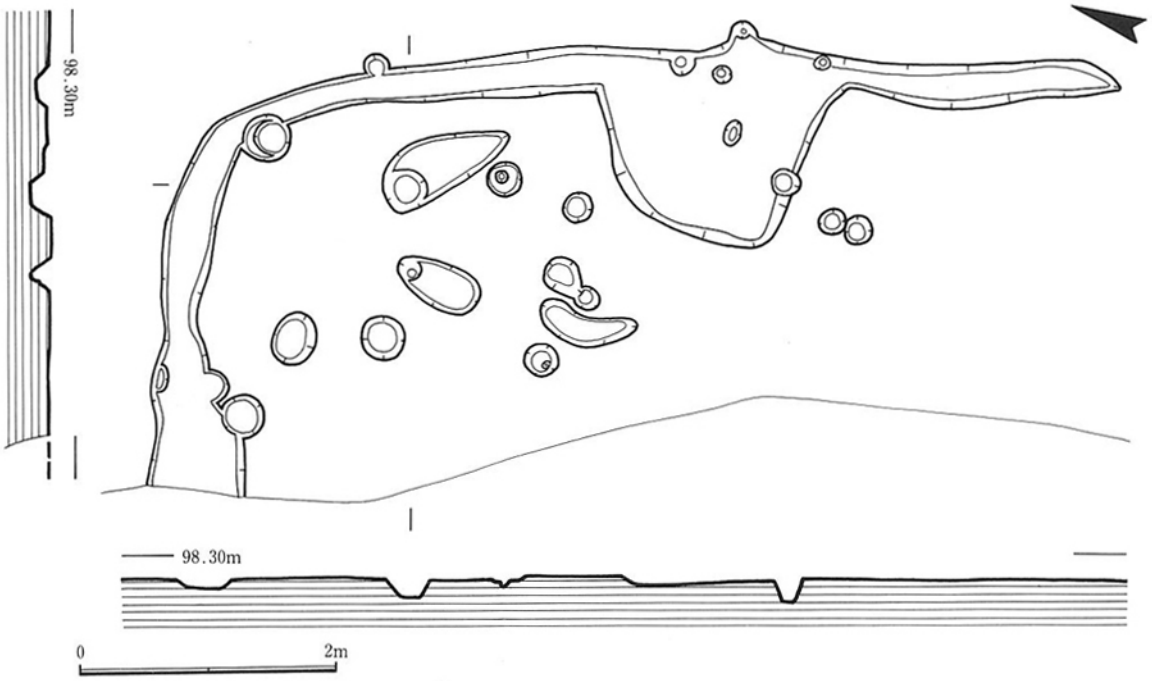
15は瓦質土器の鍋であり、脚をもたない。底部外面は叩きの痕跡をハケによって消す。

16は瓦質土器の鍋であり、脚をもたない。内・外面は細かいハケによって調整する。底部外面には叩きの痕跡は認められない。体部外面には煤が付着する。

17は瓦質土器の足鍋脚であり、先端を欠く。指および掌の痕跡を残す。

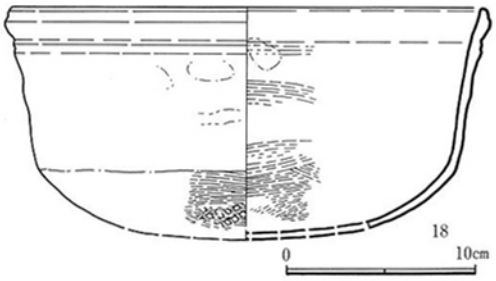
ＳＤ９（第16図）

ＳＤ９は掘立柱建物を囲む溝の一部と考えられる。ＳＤ10同様に、本来ＳＤ９は建物の北・東・南を囲んでいたものと推定される。検出部分の総延長は約10ｍである。南は削平により消失し、西は水



第16図　ＳＤ９実測図

田開発に伴って掘削を受ける。溝によって囲まれる範囲は、南北７ｍ以上、東西３ｍ以上である。溝は幅0.2～0.7ｍ、深さ0.08～0.1ｍであり、埋土は暗褐色土の単層である。溝で囲まれる範囲の中には柱穴が存在するが、掘立柱建物を復元することはできなかった。



第17図　ＳＤ９出土遺物実測図

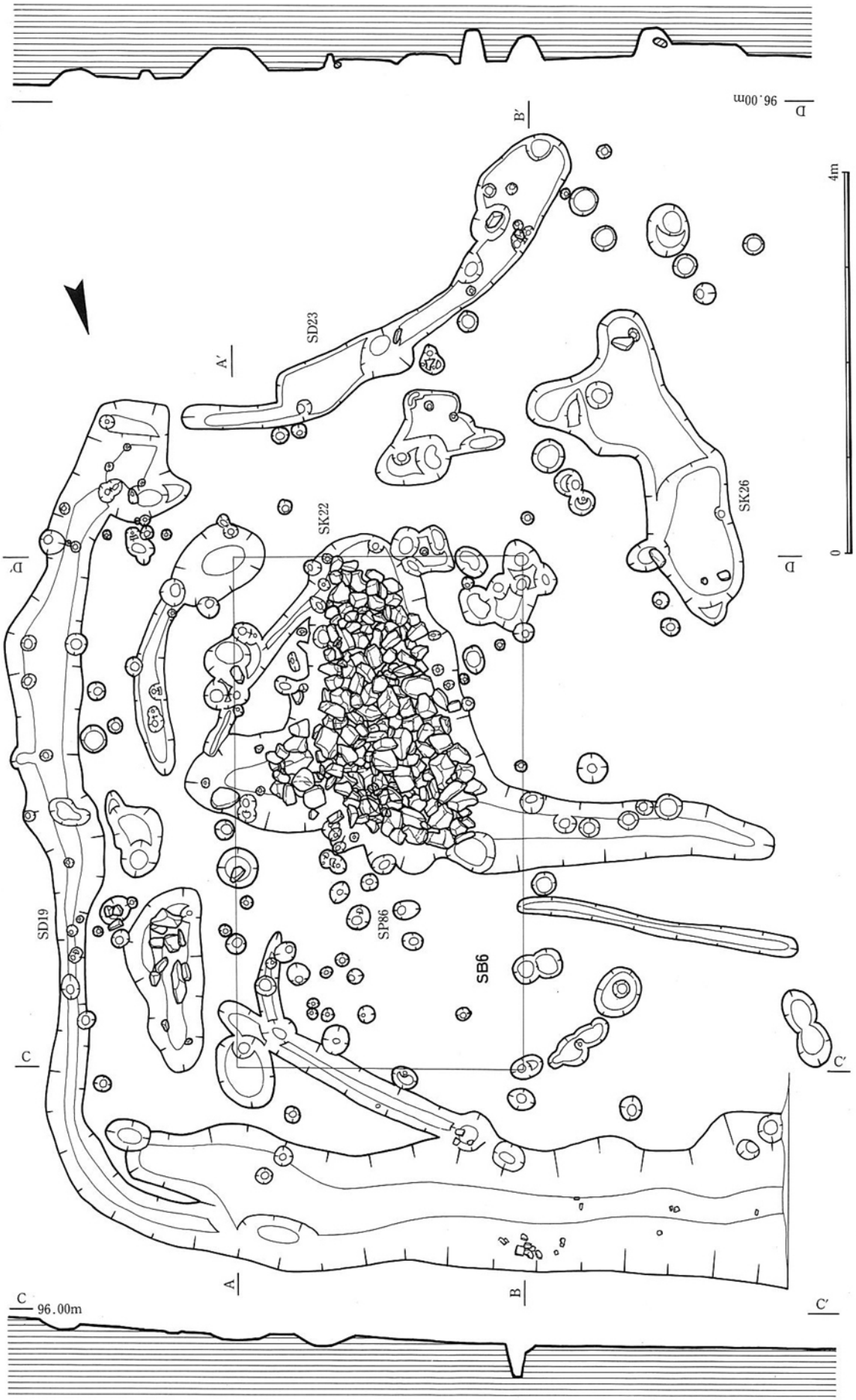
ＳＤ９から出土した遺物は少量であった。第17図18は瓦質土器の鍋である。脚の存否は不明であり、底部外面は叩きの痕跡をハケによって消す。14世紀後半の遺物と考えられる。

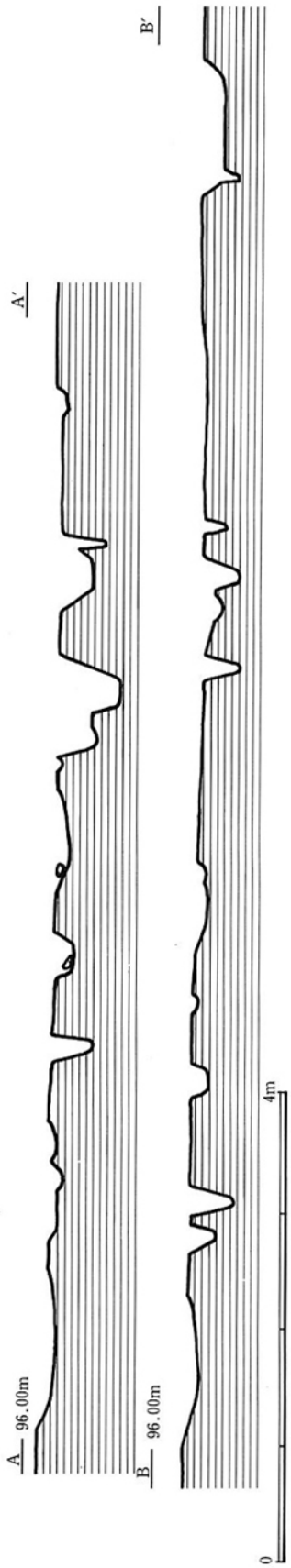
ＳＢ６およびＳＤ19・23（第18図）

ＳＢ６は溝に囲まれた１間×３間の掘立柱建物である。棟方向はN17°E、桁行長5.4ｍ、梁行長3.0ｍである。

ＳＤ19・23は一連の遺構とみられ、建物の北・東・南を囲んでおり、検出部分の総延長はＳＤ19・23合わせて約20ｍである。西は水田開発に伴って掘削を受ける。溝によって囲まれる範囲は、南北約８ｍ、東西7.4ｍ以上である。溝は幅0.3～1.8ｍ、深さ0.1～0.2ｍであり、埋土は暗褐色土の単層である。ＳＤ19・23で囲まれた範囲内には溝状の浅い掘り込みが数か所みられる。これらはＳＤ19・23と平行・直交する方向性をもっており、相互に関連するものと考えられる。

溝で囲まれた範囲の中央には敷石を伴う不整形の土坑（ＳＫ22）がある。ＳＫ22（第19図）は東西2.3ｍ、南北約3.5ｍ、深さ12～15cmの規模をもち、底面は平坦である。敷石はＳＫ22の底面直上に並べられており、東西2.1ｍ、南北3.2ｍの範囲に広がる。土坑埋土は暗褐色土の単層である。敷石の広


SD23
SK22
SK26
SD19
SP86
SB6
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
96.00m
0
4m



第18図　溝を伴う建物跡実測図（ＳＢ６・ＳＤ19・23・ＳＫ22・26）

がりはＳＫ22と相似形であることから、むしろ敷石を安定させるために土坑が掘られていると解釈すべきであろう。ＳＫ22は溝状の掘り込みと接続しているが、両者の切りあいは確認できなかった。敷石は角礫を主とし、一部円礫が用いられるが、加工痕のある石はない。石の多くは熱をうけて赤く変色する。敷石周辺からは15～16世紀の土器片とともに焼土およびスラグ若干が出土した。

遺物は主に溝で囲まれた範囲内の地山面直上とＳＤ19埋土中から出土しており、このほかにも範囲内の柱穴（ＳＰ26・86）からも少量出土した。出土遺物には土師器・瓦質土器・陶器などがある（第20図）。

19～21は土師器皿であり、底部には回転糸切りの痕跡を残す。22～25・28は鍋である。22・24・25・28は土師質、23は瓦質である。いずれも脚の存否は不明である。25は底部外面の叩き痕をハケによって消す。26・29は瓦質のすり鉢である。27は備前焼すり鉢であり、口縁端部を欠く。30は象嵌青磁壺の肩部破片である。外面は白色土の象嵌と沈線による施文ののち施釉され、内面は無釉である。13～14世紀の高麗の象嵌青磁とみられる。

19～23・25・26・30は地山面直上、24・27はＳＤ19、28はＳＰ86、29はＳＰ26から出土した。30以外は15世紀後半ないし16世紀前半の遺物と考えられる。

（３）土坑（第21図）

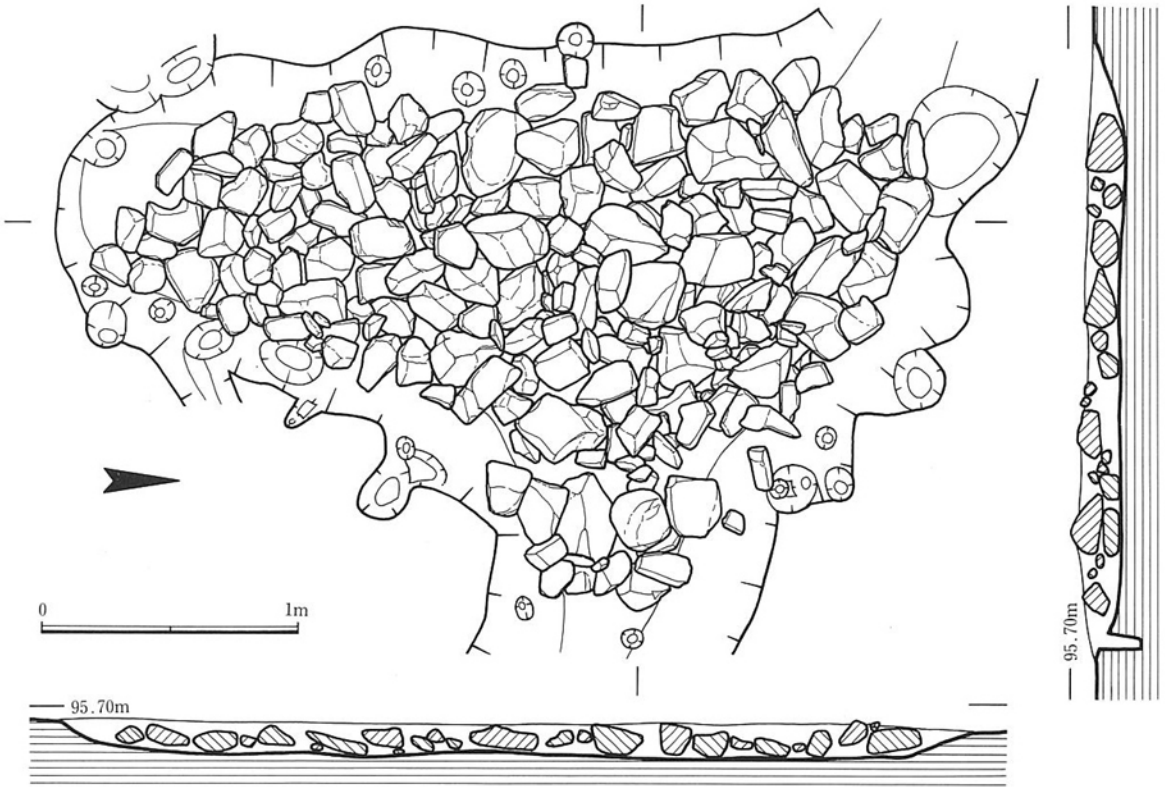
Ⅲ地区で確認された土坑は44基である。時期の明らかなものについては、14世紀から18世紀にわたっている。しかし多くの土坑は埋土中に遺物を含んでいないため、時期は不明である。

ＳＫ16

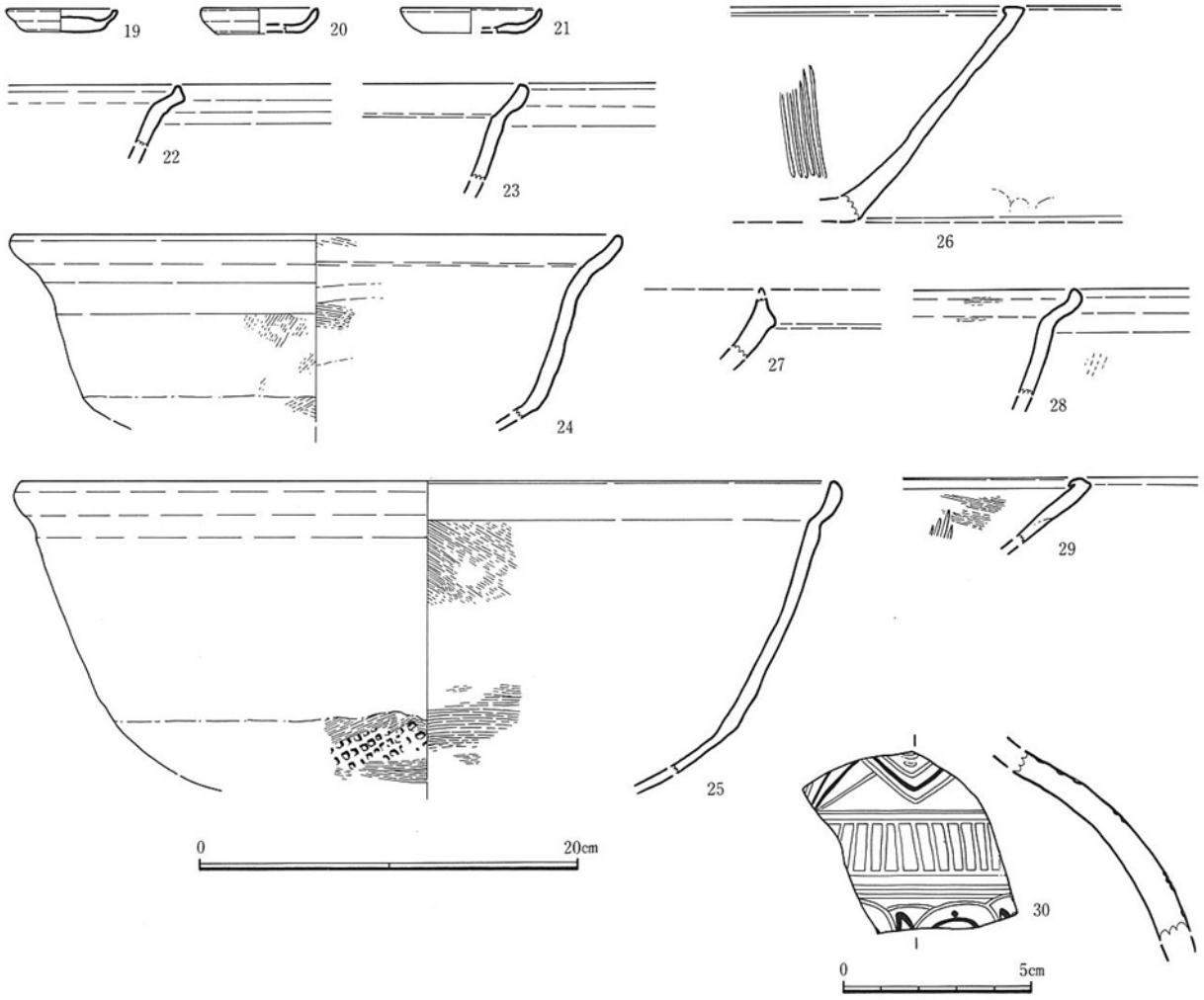
ほぼ東西方向に主軸をとる長軸1.1ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.12ｍの長円形の土坑である。西側では２段に掘り込まれており、人頭大の角礫とともに土師器杯・鍋（第22図31・32）が出土した。埋土は黒褐色土の単層である。14世紀の遺構と考えられる。

ＳＫ18

ほぼ南北に主軸をとる長軸1.2ｍ、短軸0.9ｍ、深さ0.07ｍの長円形の土坑である。埋土は褐灰色土の単層であり、スラグが出土した。時期は不明である。



第19図　ＳＫ22実測図



第20図　ＳＢ６周辺出土遺物実測図

ＳＫ13

Ｎ43°Ｅに主軸をとる長軸1.4ｍ、短軸0.9ｍ、深さ0.07ｍの長円形の土坑である。底面に接する状態で扁平な自然石が出土した。底面東側には浅い小坑が掘り込まれる。埋土は暗褐色土の単層であり、土師器・瓦質土器の小片が出土した。中世の遺構であるが、詳細な年代は不明である。

ＳＫ32

Ｎ21°Ｅに主軸をとる長軸0.9ｍ、短軸0.6ｍ、深さ0.31ｍの長円形の土坑である。底面中央に小坑(土坑底面からの深さ0.2ｍ)が掘り込まれる。埋土は暗褐色土の単層であり、遺物は出土しなかった。形態的には、縄文時代に多くみられる落し穴に近い。時期は不明である。

ＳＫ10

長径1.3ｍ、短径1.2ｍ、深さ0.26ｍのほぼ円形の土坑である。底面東側に小坑が掘り込まれる。埋土は暗褐色土の単層であり、磁器片および骨片が出土した。骨片は火をうけて細片となっており、人骨・獣骨の判別および部位の同定はできなかった。骨片は無秩序に埋土中に混在することから、墓の可能性は低いと考えられる。18世紀の遺構である。

ＳＫ11

長径1.2ｍ、短径1.0ｍ、深さ0.18ｍのほぼ円形の土坑であり、ＳＫ10と隣接する。底面中央付近に小坑が掘り込まれる。埋土は暗褐色土の単層であり、骨片が出土した。骨片は火をうけて細片となっており、人骨・獣骨の判別および部位の同定はできなかった。ＳＫ10同様に、骨片が無秩序に埋土中に混在することから、墓の可能性は低いと考えられる。時期を決定できる遺物は出土していないが、ＳＫ10と同種の遺構であることから、18世紀の遺構と考えられる。

ＳＫ25

Ｎ55°Ｗに主軸をとる長軸1.8ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.16ｍの隅丸長方形の土坑である。埋土は暗褐色土の単層であり、土師器・瓦質土器の小片が出土した。15世紀の遺構と考えられる。

ＳＫ21

ほぼ南北に主軸をとる長軸2.4ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.49ｍの長円形の土坑である。底面北寄りおよび中央付近に小坑（土坑底面からの深さ0.10ｍ）が掘り込まれる。埋土は黒褐色土の単層であり、遺物は出土しなかった。ＳＫ32同様に形態的には、縄文時代に多くみられる落し穴に近い。時期は不明である。

ＳＫ14

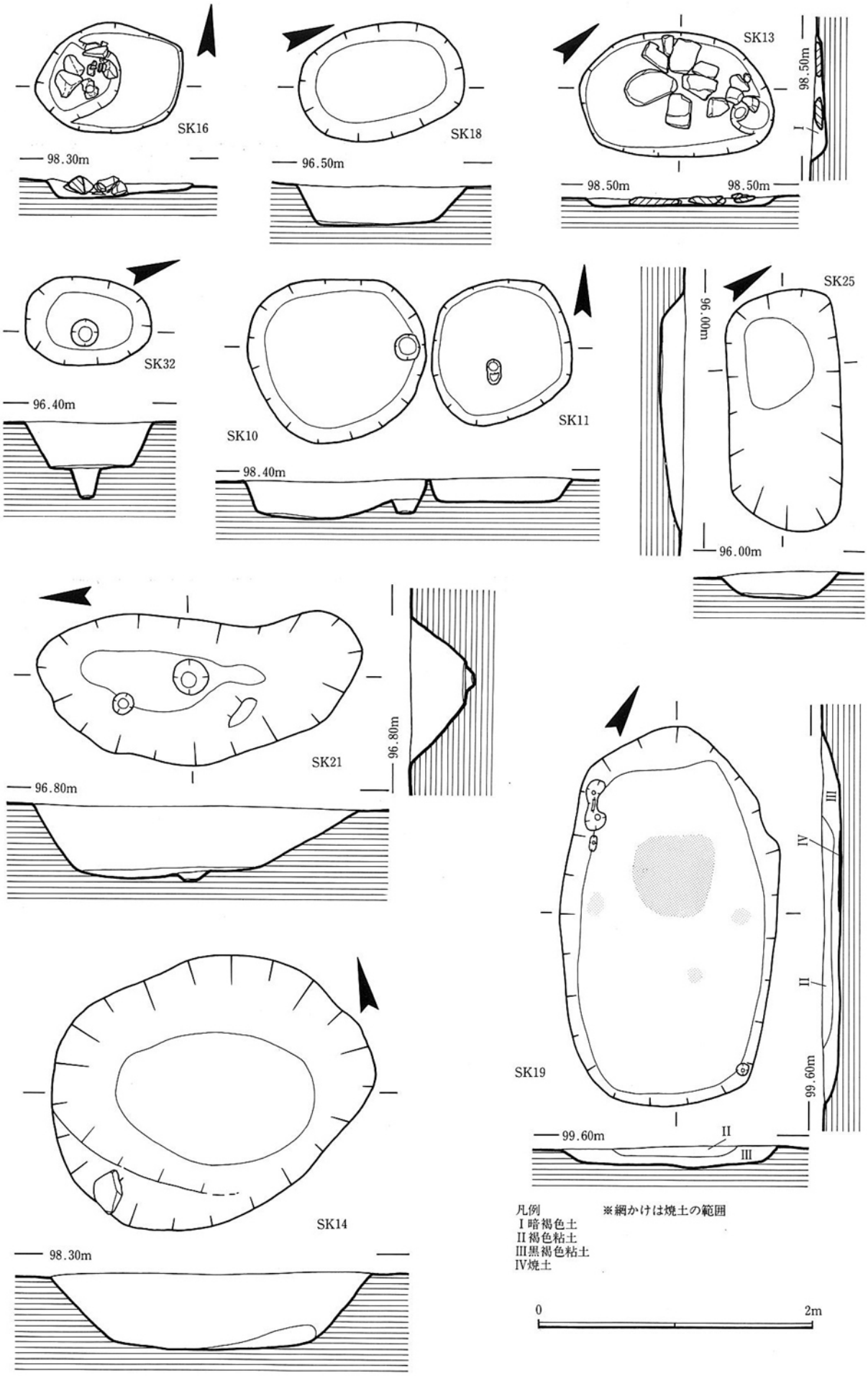
ほぼ南北に主軸をとる長軸2.4ｍ、短軸1.8ｍ、深さ0.54ｍの長円形の土坑である。埋土は黒褐色土の単層であり、遺物は出土しなかった。時期は不明である。

ＳＫ19

Ｎ29°Ｗに主軸をとる長軸2.7ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.15ｍの隅丸長方形の土坑である。底面は部分的に焼け締まる（実測図網掛け部分)。埋土は黒褐色土の単層であり、焼土・スラグが出土した。時期は不明である。

土坑出土の遺物で図化可能なものは、ＳＫ16・23・26の土器および磁器である。

第22図31・32はＳＫ16出土の遺物である。31は土師器杯である。底部は回転糸切りされ、板目圧痕



第21図　Ⅲ地区土坑実測図

を残す。32は土師器鍋であり、脚をもたないと考えられる。底部外面はハケで調整され、叩き目の痕跡は認められない。33は瓦質土器茶釜である。鍔以下には煤が付着する。34はＳＫ26出土の白磁碗底部である。見込には花文が彫り込まれる。高台部分を除き、明緑灰色の釉が施される。

（４）溝（第23・24図）

Ⅲ地区で確認された溝は22条であり、この内の４条についてはすでに紹介した。全体的に遺物の出土量が少なく、時期の不明なものが多い。時期の判明した遺構については、14世紀から16世紀にわたっている。

ＳＤ14

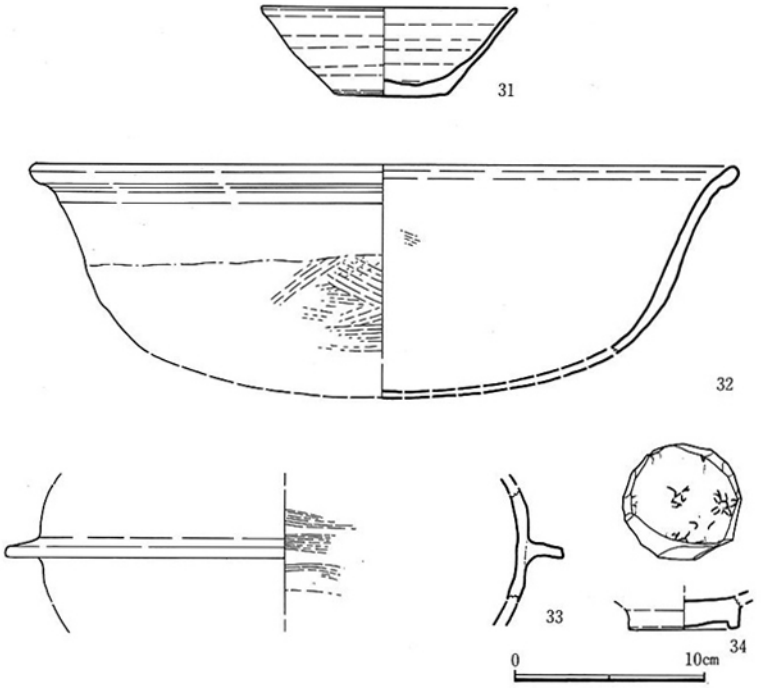
今回調査した範囲において最も規模の大きい溝である。調査の時点では切り合いは確認されなかったため１条の溝として扱うが、複数時期の溝が重複している可能性がある。主軸はＮ25°Ｗ～Ｎ53°Ｗであり、緩やかに湾曲する。検出部分の長さは約21ｍである。幅は最大2.0ｍ（第23図Ａ－Ａ′付近）であり、北西端では深さ0.52ｍである。北西端付近では断面形はＶ字状をなす。高位にある南東端と低位の北西端での底面の標高差は、1.67ｍである。南東端の底面および北西端付近のテラス上には集石がみられる。遺物はほとんど出土しなかった。15～16世紀の遺構と考えられる。

ＳＤ22

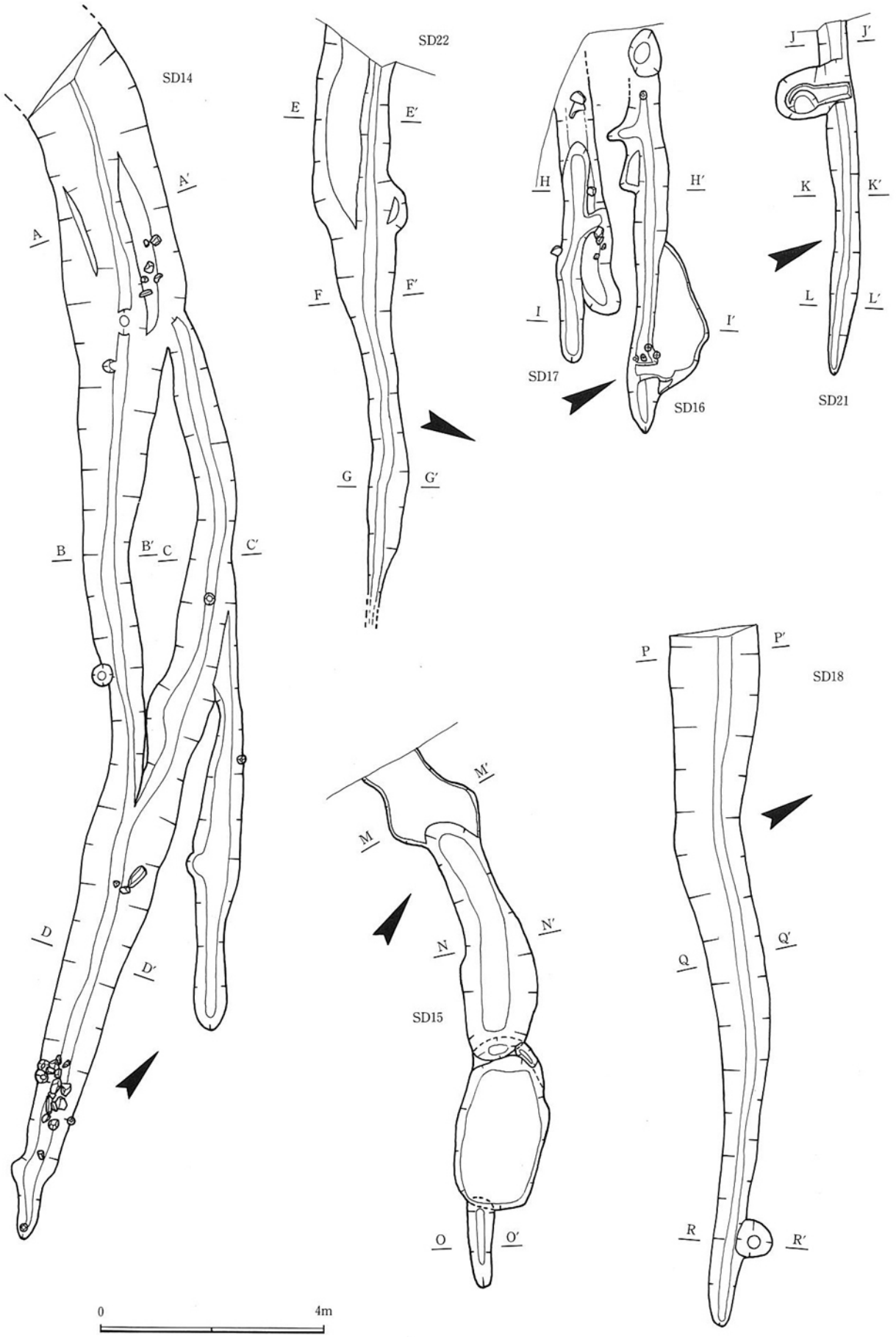
主軸はＮ52°Ｅであり、緩やかに蛇行する。検出部分の長さは約10ｍである。南西端付近にはテラス状の部分がある。幅は最大1.3ｍであり、南西端では深さ0.20ｍである。高位にある北東端と低位の南西端での底面の標高差は、0.19ｍである。埋土は暗褐色土の単層であり、土師器・瓦質土器片が出土した。15世紀の遺構と考えられる。

ＳＤ17

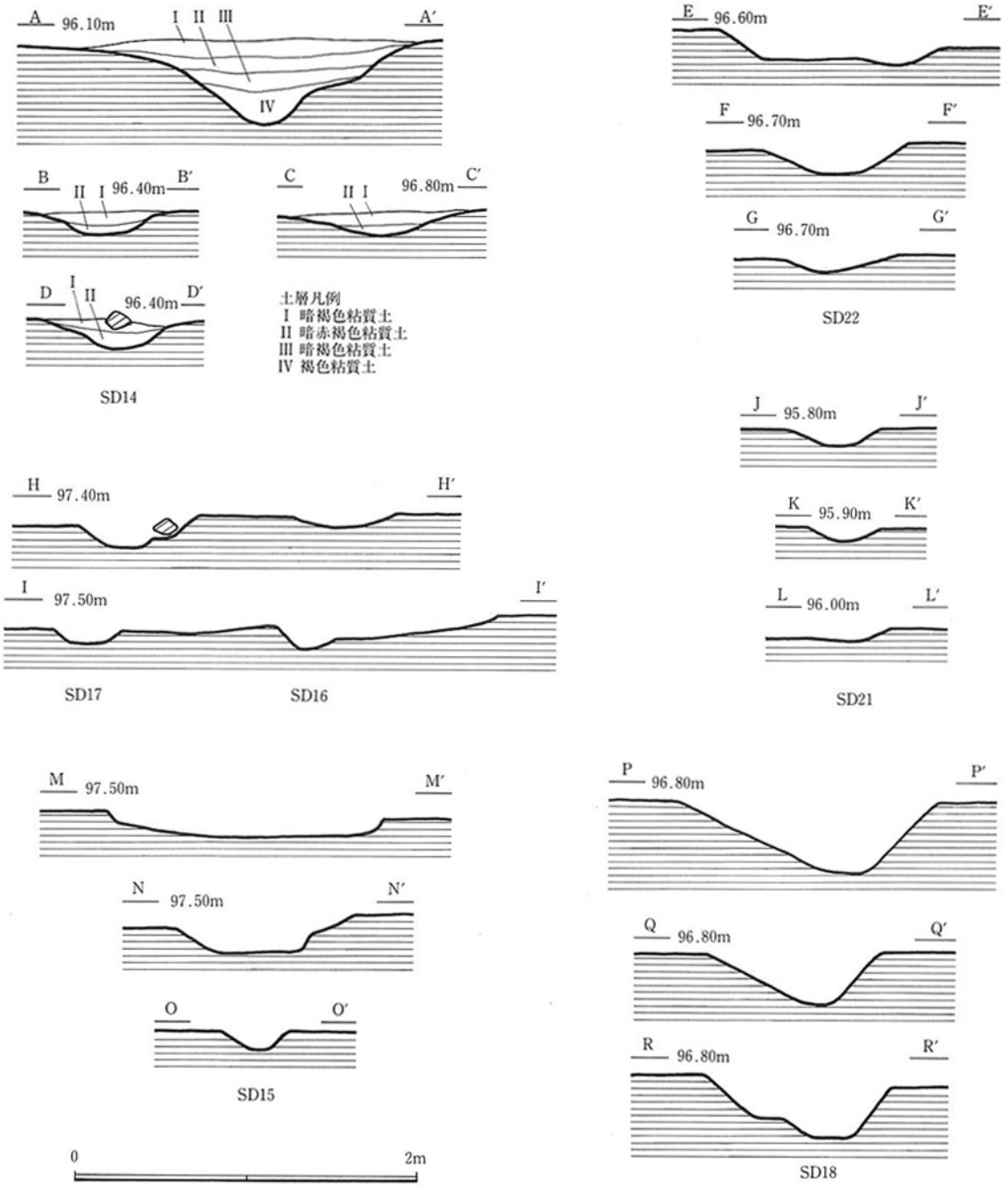
主軸はＮ62°Ｗ～Ｎ73°Ｗであり、検出部分の長さは約５ｍである。単一の遺構として扱ったが、２条の溝の重複である可能性がある。幅は最大1.1ｍであり、北西端では深さ0.08ｍである。最も深いのは中央付近であり、0.25ｍである。高位にある南東端と低位の北西端での底面の標高差は、0.21ｍである。埋土は暗褐色土の単層であり、土師器・瓦質土器片が出土した。14～15世紀の遺構と考えられる。



第22図　ＳＫ22・23・26出土遺物実測図



第23図　III地区溝実測図



第24図　III地区溝断面図

ＳＤ16

主軸をＮ65°Ｗにとる直線的な溝である。検出部分の長さは6.2ｍであり、南東部分にテラスをもつ。幅は最大1.3ｍ（テラスを含む）であり、北西端では深さ0.11ｍである。高位にある南東端と低位の北西端での底面の標高差は、0.26ｍである。埋土はにぶい黄褐色土の単層であり、土師器鍋片（第25図35）・瓦質土器片が出土した。15世紀の遺構と考えられる。

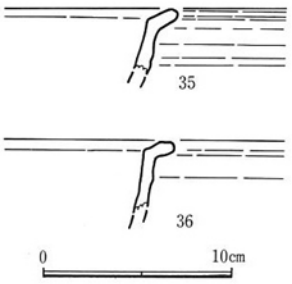
ＳＤ21

主軸をＮ57°Ｗ～Ｎ68°Ｗにとり、わずかに湾曲する溝である。検出部分の長さは6.2ｍであり、北西端付近は土坑と重複する。幅は最大0.5ｍであり、北西端では深さ0.09ｍである。高位にある南東端と低位の北西端での底面の標高差は、0.20ｍである。暗褐色土の単層であり、遺物はほとんど出土し

なかった。時期は不明である。

ＳＤ15

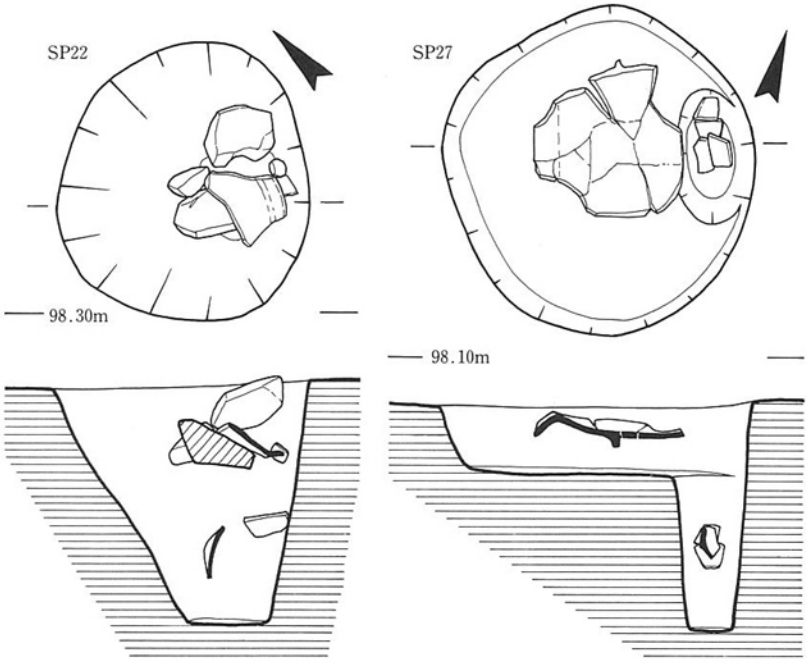
主軸をN35°W～N67°Wにとり、蛇行する溝である。検出部分の長さは8.9ｍであり、南東部は土坑（ＳＫ19）によって切られる。幅は最大1.3ｍであり、北西端では深さ0.10ｍ、最も深い中央部での深さは0.28ｍである。高位にある南東端と低位の北西端での底面の標高差は、0.20ｍである。暗褐色土の単層であり、遺物はほとんど出土しなかった。時期は不明である。

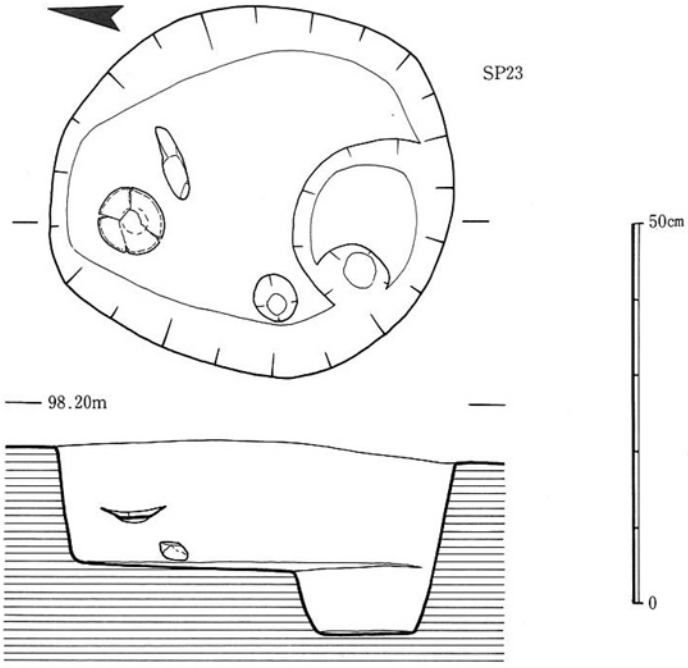


第25図　ＳＤ16・18出土遺物実測図

ＳＤ18

主軸をN59°Wにとり、緩やかに蛇行する溝である。検出部分の長さは12.4ｍであり、南東端付近では柱穴と重複する。幅は最大1.6ｍであり、北西端では深さ0.43ｍである。高位にある南東端と低位の北西端での底面の標高差は、0.37ｍである。埋土はにぶい黄褐色土の単層であり、土師器鍋片（第25図36）・瓦質土器・陶器の破片および焼土が出土した。14～15世紀の遺構と考えられる。

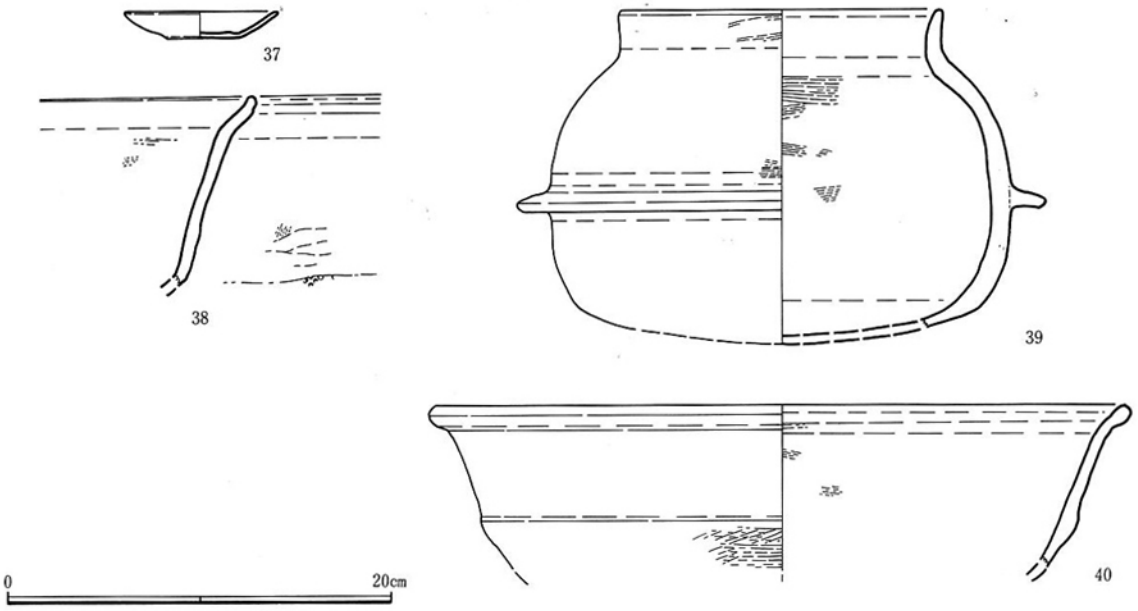




第26図　ＳＰ22・23・27実測図

（５）柱穴（第26図）

Ⅲ地区では約700個の柱穴が発見された。大半のものは、本来掘立柱建物を構成していたと考えられるが、建物として復元されたものはわずかであった。ここでは、遺物の出土状況に特徴のあるものを紹介する。なお、柱穴として紹介するこれらの遺構は地鎮祭等のような祭祀に伴う遺構で



第27図　ＳＰ22・23・27・79出土遺物実測図

ある可能性もある。

ＳＰ22

長径0.36ｍ、短径0.32ｍ、深さ0.32ｍのほぼ円形の柱穴である。埋土は黒褐色土の単層であり、礫とともに土師器鍋片（第27図40）・瓦質土器片が出土した。

ＳＰ27

径約0.4ｍ、深さ0.08ｍのほぼ円形の柱穴であり、底面東側に小坑が掘り込まれる。埋土は黒褐色土の単層であり、瓦質土器茶釜片（第27図39）・瓦質土器片が出土した。

ＳＰ23

長径0.53ｍ、短径0.48ｍ、深さ0.17ｍのほぼ円形の柱穴であり、底面南側に小坑（柱穴底面からの深さ0.21ｍ）が掘り込まれる。埋土は黒褐色土の単層であり、ほぼ完形の土師器杯（第27図37）が出土した。

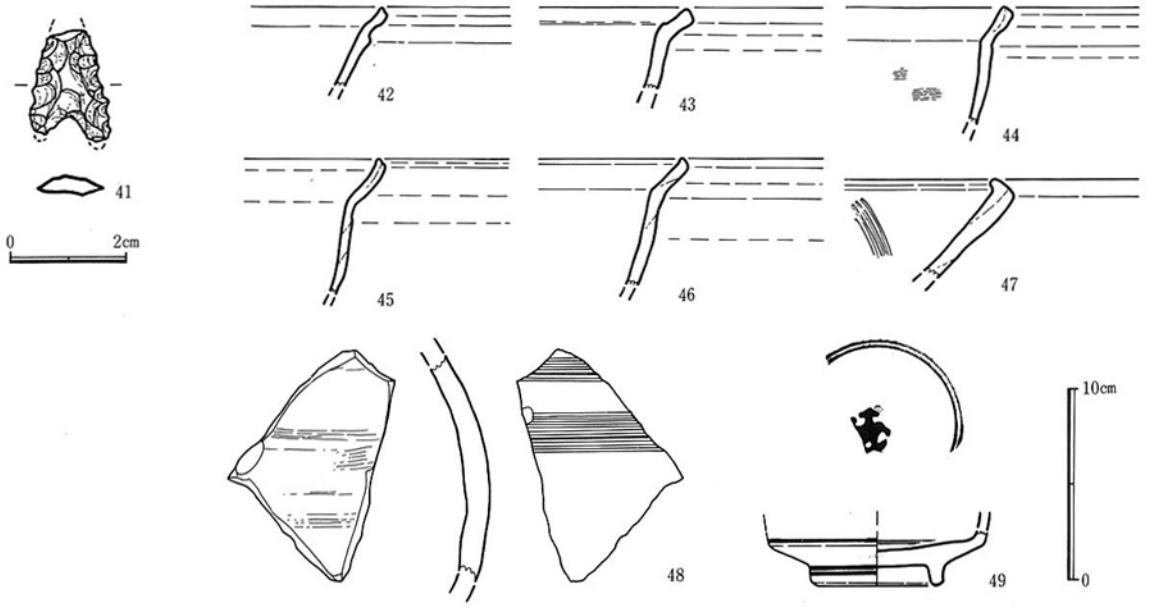
第27図は柱穴出土の遺物である。ここでは図化可能な遺物について紹介する。

37はＳＰ23出土の小型の土師器杯である。底部外面には回転糸切りの痕跡を残す。

38はＳＰ79出土の瓦質土器鍋である。底部外面には叩きの痕跡を残す。脚の存否は不明である。

39はＳＰ27出土の瓦質土器茶釜である。内面および底部外面はハケによって調整する。底部は体部に比して薄手である。

40はＳＰ22出土の土師質の鍋である。底部外面はハケによって調整し、叩きの痕跡は認められない。脚の存否は不明である。



第28図　Ⅲ地区遺構に伴わない遺物実測図

（6）遺構に伴わない遺物（第28図）

Ⅲ地区の遺物包含層および表土中から出土した遺物のうち主なものを以下に紹介する。

41は打製石鏃である。安山岩製であり、先端部を欠く。

42～46は鍋口縁である。42・44・45は瓦質土器、43・46は土師器である。

47は瓦質土器のすり鉢である。内面には櫛目が一部に残る。

48は備前焼とみられる陶器壷の肩部片である。外面には櫛状の工具による平行沈線がみられる。平行沈線は10条が単位となっている。

49は陶器椀底部である。内外とも施釉され、畳付には全周に砂目が付着する。見込中央にはコンニャク印判によってくずれた五弁花が染付けられる。なお、五弁花は印判のずれによって一部二重になっている。

5 まとめ

冷泉家北遺跡は玖珂郡周東町大字祖生に所在する中世集落遺跡である。

発掘調査の結果、13世紀から16世紀にかけて集落が存在したことが明らかになった。集落を構成する要素としては、掘立柱建物跡・土坑・溝・柱穴がある。今回の調査では井戸・墓は確認されなかった。

冷泉家北遺跡における特徴的な遺構としては、溝を伴う建物跡がある。この種の遺構は今回３例確認できた。後世の耕地開発によって全体像を知り得る例はないものの、緩斜面高位側を溝で囲む点で共通する。斜面高位側を溝で囲むことは、その内部に湿気が入り込むことを避けるための処置であり、窯跡または冶金関連遺構では一般的にみられる。特に、Ⅲ地区ＳＢ６（およびＳＤ19・23）は建物の中央に熱を受けて変色した敷石が存在することから、居住には不適切である。これに加え、敷石が焼けていること、敷石周辺から焼土・スラグが出土することからもこの遺構が冶金関連施設（工房）である蓋然性が高い。しかし、残念ながら類例に乏しいため、現時点では断定することはできない。

冷泉家北遺跡の調査で最も注目される点は、冷泉氏館跡と本遺跡との関連であろう。冷泉氏の祖は大内弘世の子弘正であり、おそくとも文明十（1478）年には周防国祖生村に居住していたとされる。そして弘治四（1558）年には冷泉元豊が毛利隆元から祖生郷1000貫の地を与えられる。19世紀初めの『玖珂郡志』によれば、冷泉隆豊屋敷は祖生村の「別所畑・小丸山」にあり、「厩ノ跡・蔵ノ跡・風呂ヤノ跡・築山ノ跡・鞠庭ノ跡・本門ノ跡・道形アリ。四方ニ土井残レリ。石垣ノ処モアリ。堀ノ跡モアリ。」と記されている。現在、冷泉氏館の所在地とされているのは、冷泉家北遺跡に隣接する低丘陵（第１図および第29図中央）であり、この付近は「別所畑（現在の別東・別西）」と称されていた。この丘陵には土塁の跡や五輪塔の集積がみられ、「冷泉社」が祭られている。また、丘陵南西麓には「ホリバタ」と呼ばれるＬ字形の水田があり、堀の跡と考えられている。第29図に掲げた地形図（4000分の１）を参照すれば、冷泉氏館が残丘頂部に位置することが看取できる。この地点は周囲から孤立し、ある程度眺望のきく地盤の安定した地点である。そして冷泉家北遺跡はこの残丘から伸びる尾根筋に位置している。両遺跡の周辺は島田川およびその支流によって形成された氾濫原および扇状地であり、居住には適さないことから、両遺跡とも地理的制約を強く受けていることがわかる。

冷泉家北遺跡は堀を隔てて冷泉氏館跡に隣接する。調査の結果、14～16世紀の遺構が最も多いことが判明しており、冷泉家北遺跡が冷泉氏館の存続期間と重なることが明らかとなった。冷泉氏館跡から14世紀の備前焼甕（未報告）が出土していることを考え合わせれば、これまで不明であった館の開始時期が14世紀までさかのぼる可能性が高まったといえよう。また、冷泉家北遺跡からは13世紀の遺構・遺物も発見されていることから、冷泉氏館の存続期間については更にさかのぼる可能性がある。

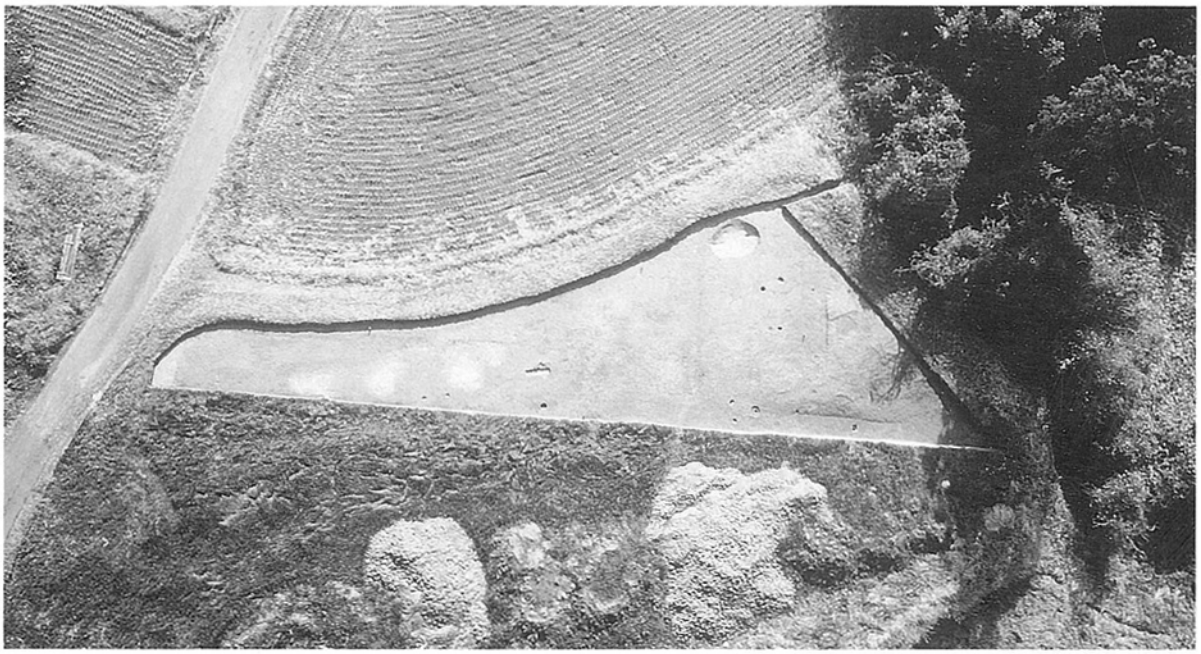
冷泉家北遺跡が冷泉氏館に関連する集落であるならば、集落の住民は冷泉氏の家臣または従属的な手工業者・農民と推定される。仮に手工業者が含まれていたとするなら、冷泉家北遺跡で発見された溝を伴う建物跡は鍛冶屋の遺構として理解が容易となる。類例を待ちたい。

第29図　冷泉氏館跡周辺地形図（約４千分の１）

冷泉家北遺跡遠景（西から）

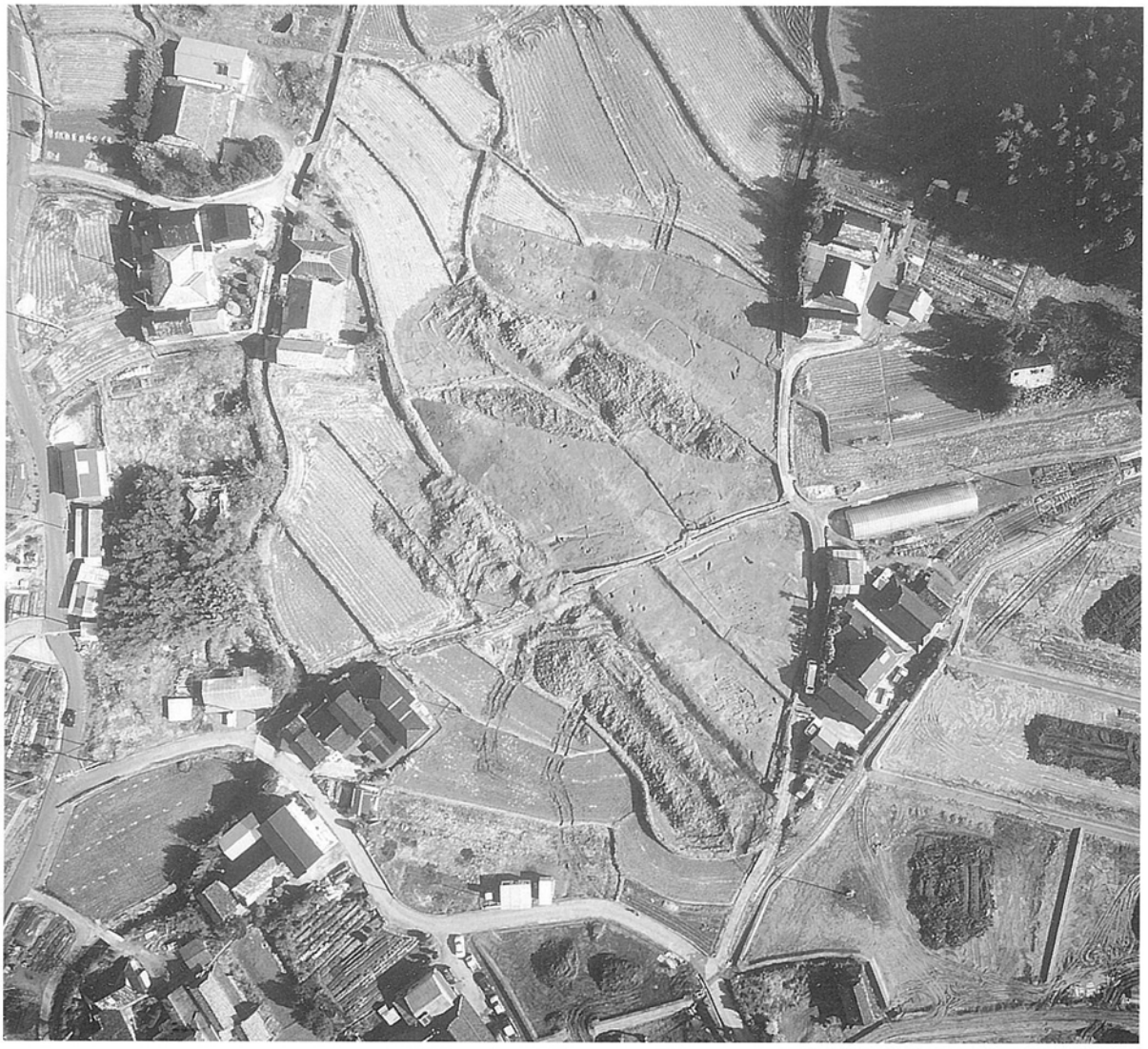
図版第 2

冷泉家北遺跡近景（西から）



冷泉家北遺跡II地区全景（北から）

冷泉家北遺跡Ⅰ地区全景（南から）



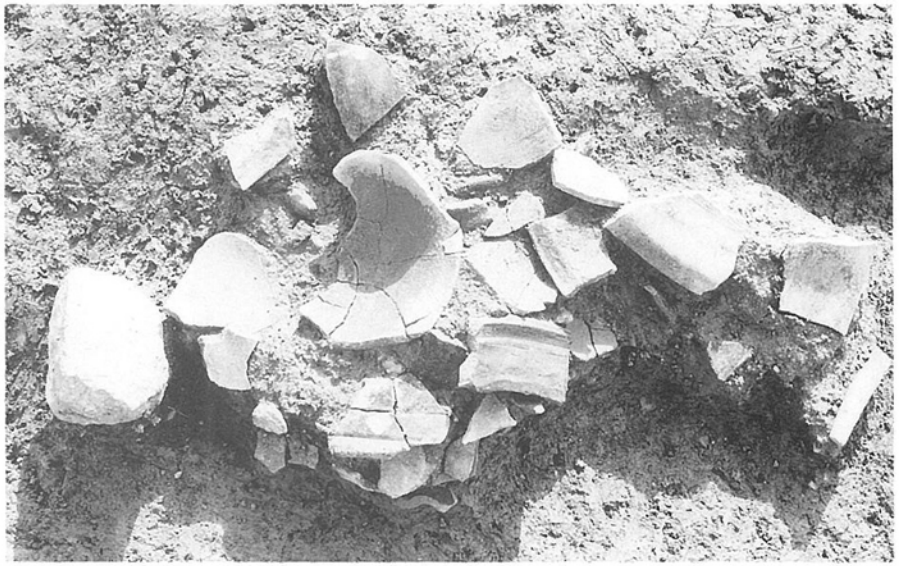
冷泉家北遺跡Ⅲ地区全景（西から）

図版第４

ＳＢ３・ＳＤ10（西から）

ＳＢ３・ＳＤ10（北から）

ＳＤ９・ＳＤ10



ＳＤ10遺物出土状況

ＳＤ10遺物出土状況

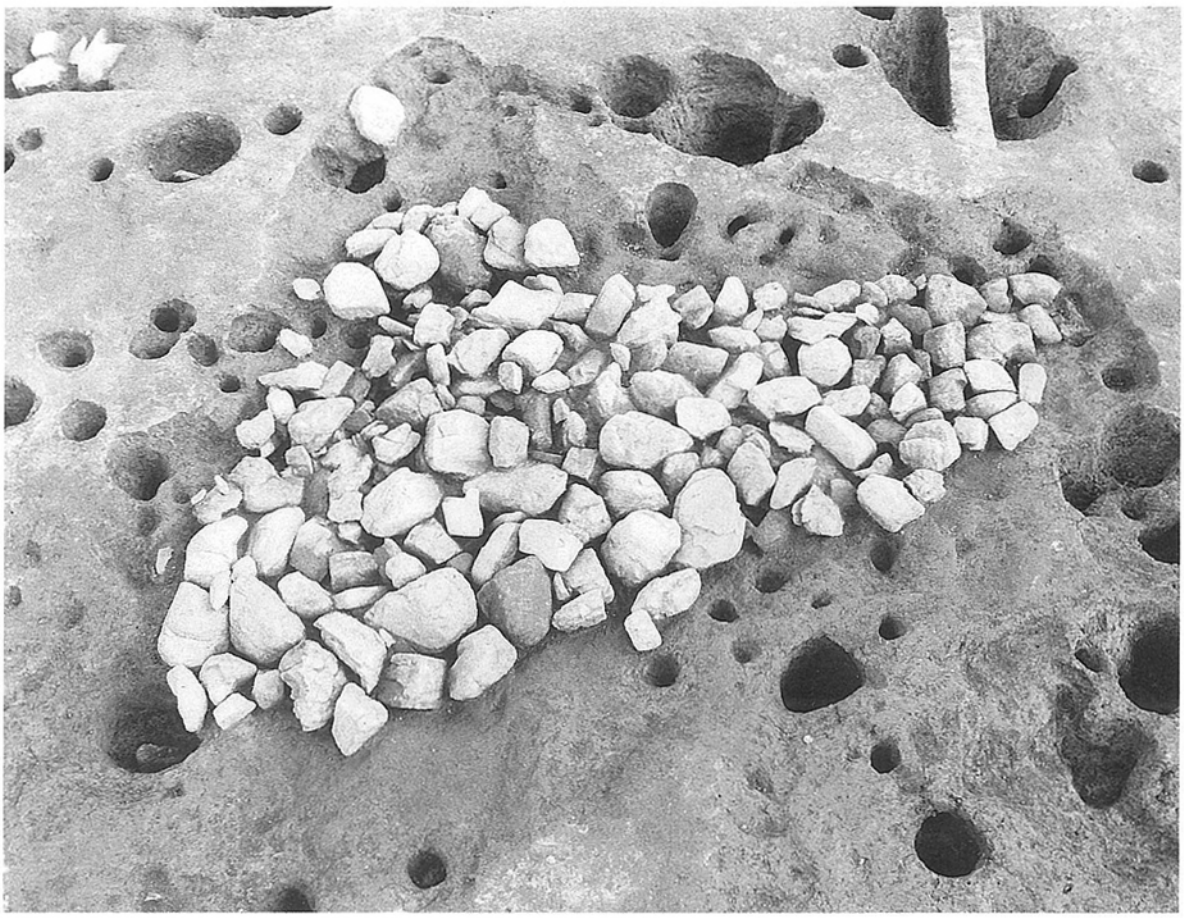
ＳＤ10遺物出土状況

図版第５

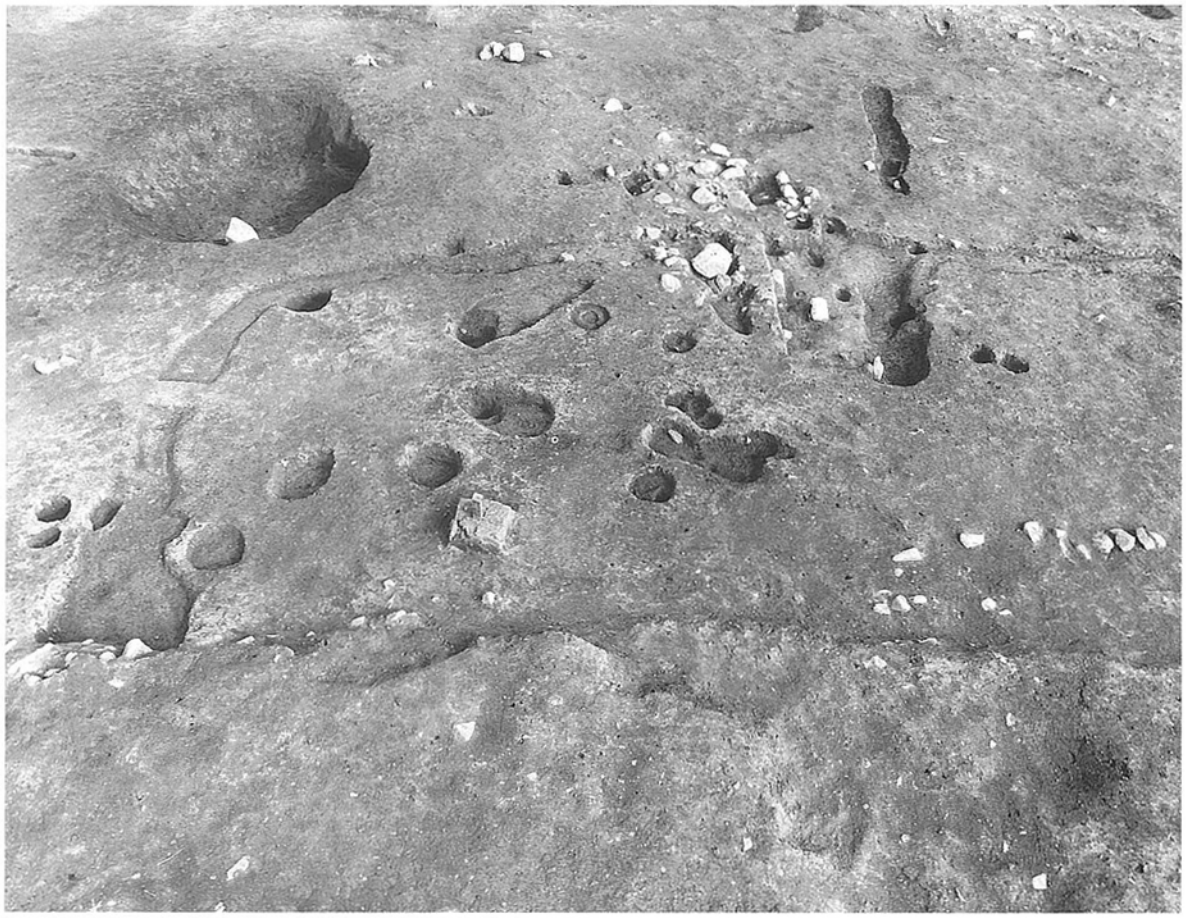
図版第６

ＳＢ６・ＳＤ19（東から）

ＳＢ６・ＳＤ19（南から）



SK22



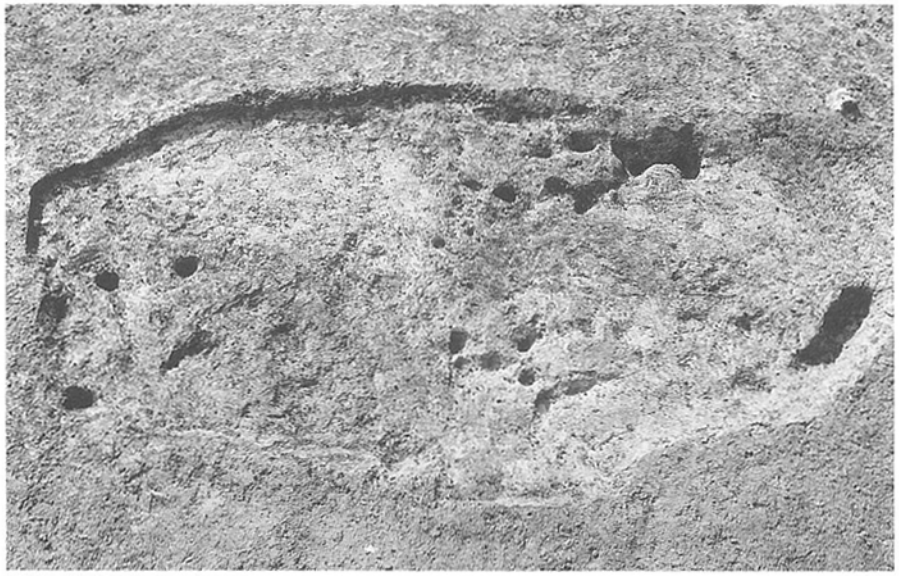
SD9

図版第８

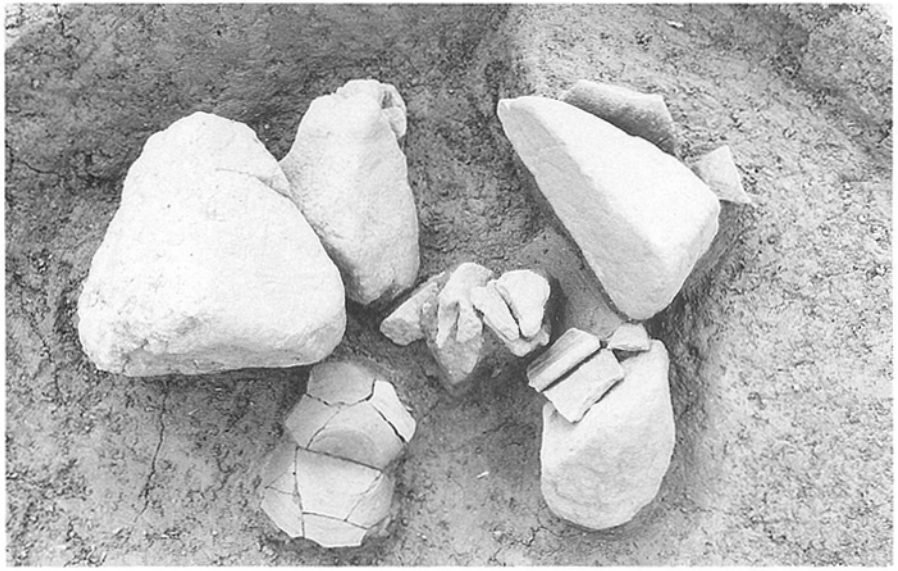
ＳＫ８

ＳＫ６

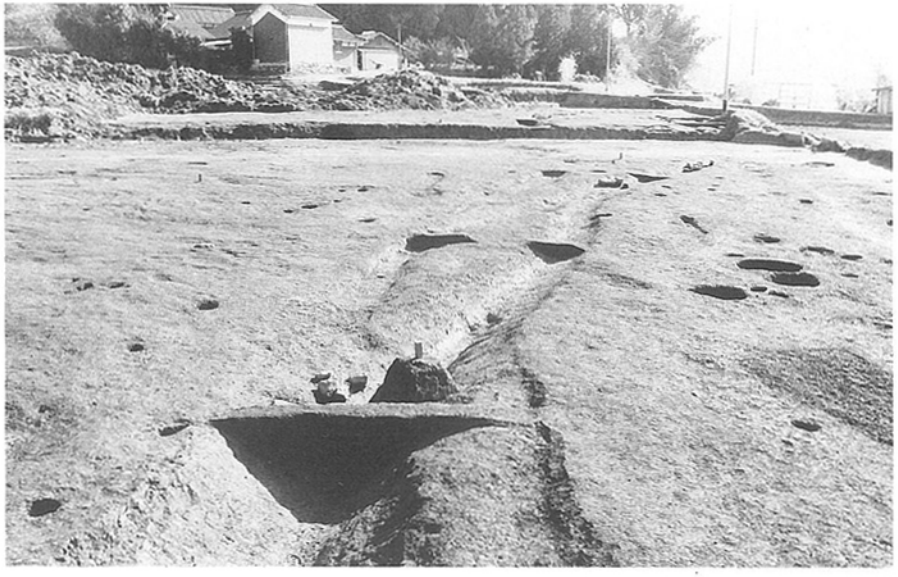
ＳＫ13



ＳＫ19



ＳＫ16遺物出土状況

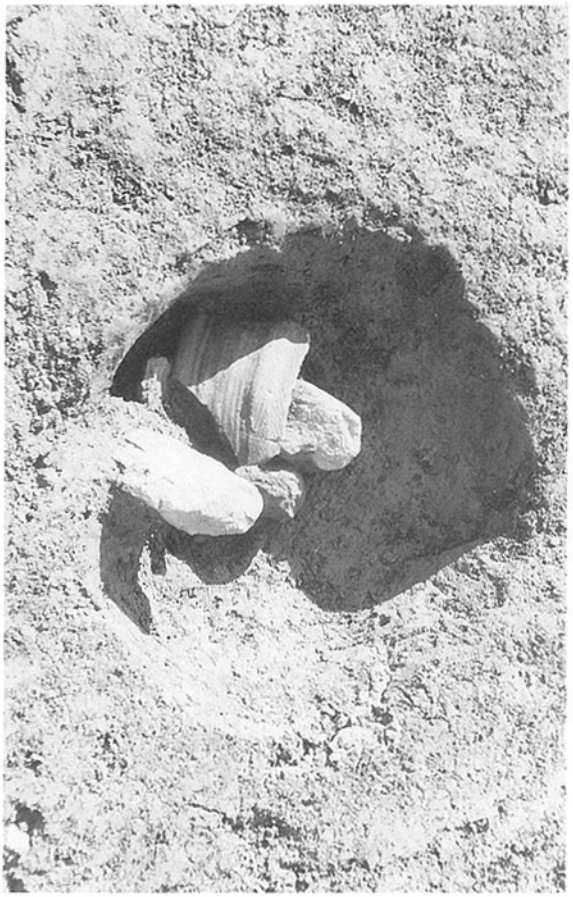


ＳＤ14

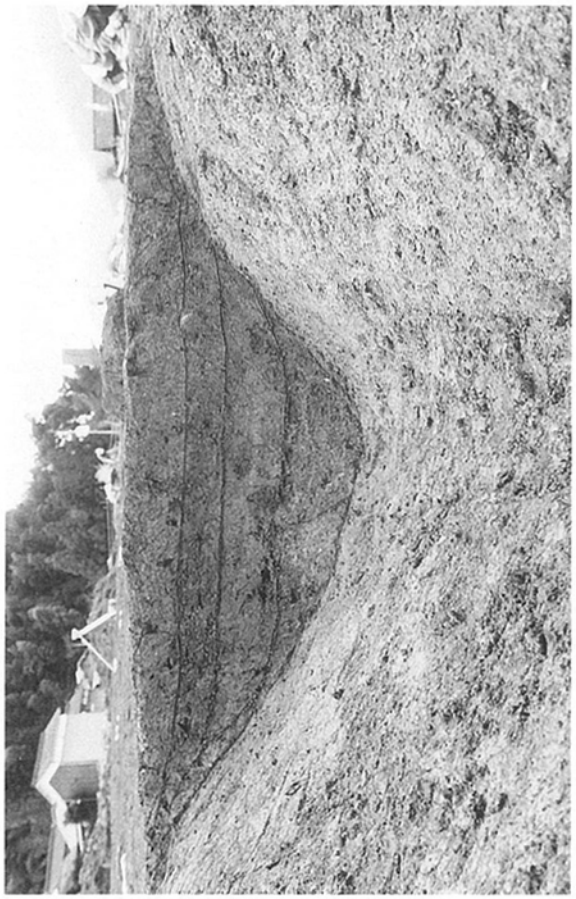
図版第９

図版第10

ＳＰ27遺物出土状況

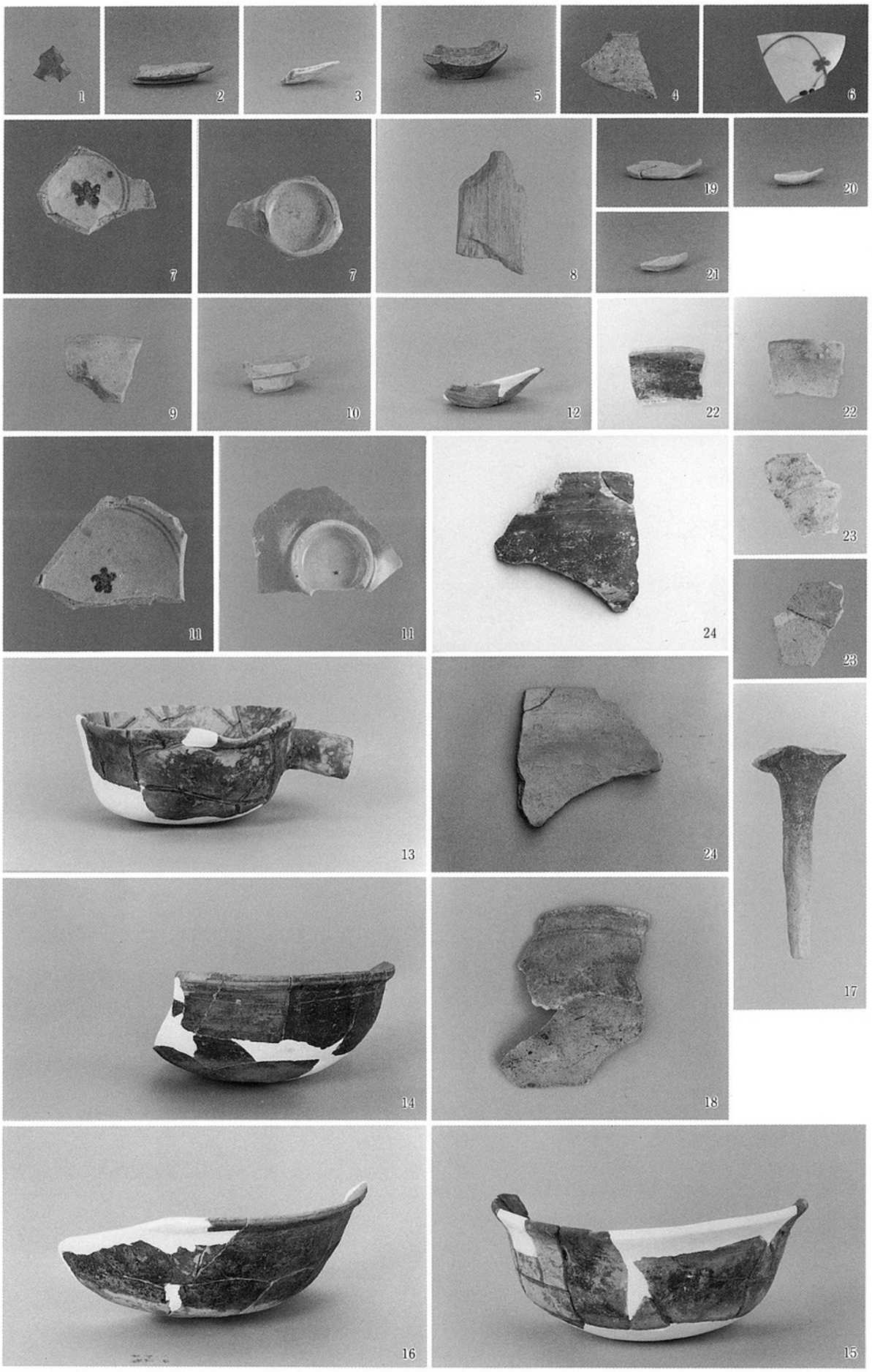


ＳＰ22遺物出土状況



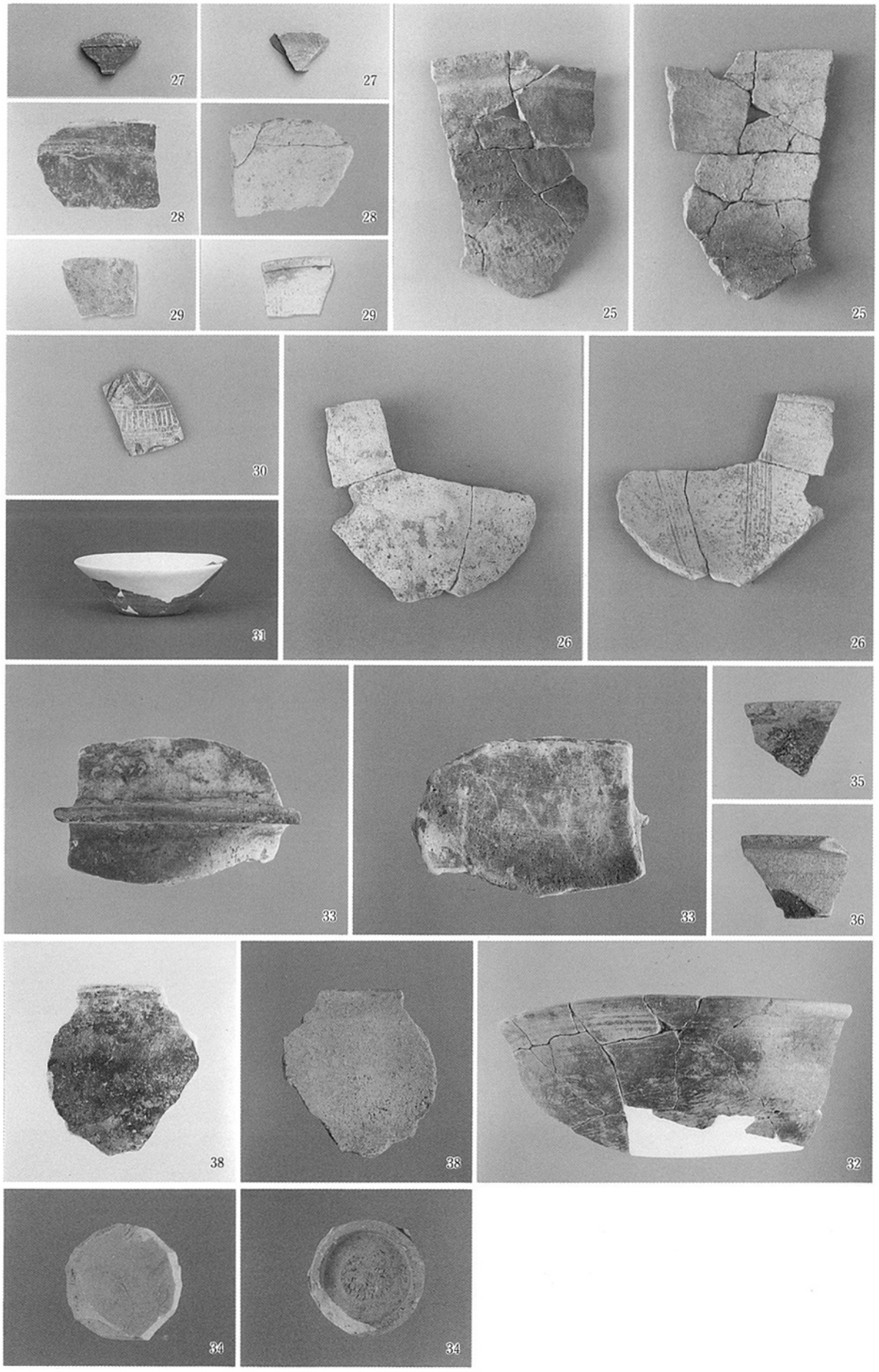
ＳＤ14

ＳＰ23遺物出土状況

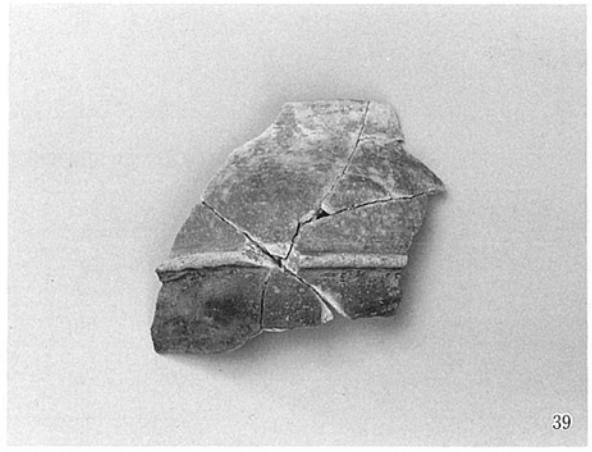


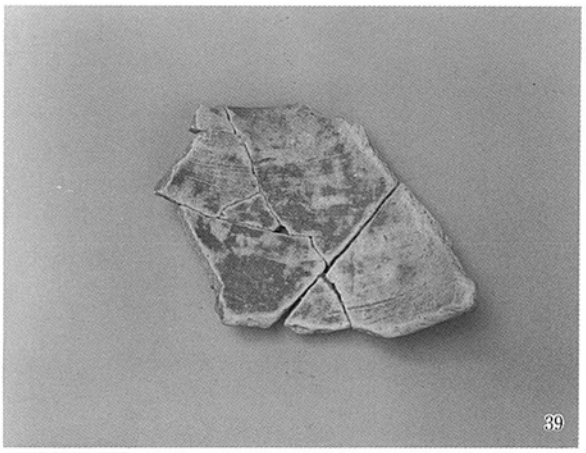
出土遺物①

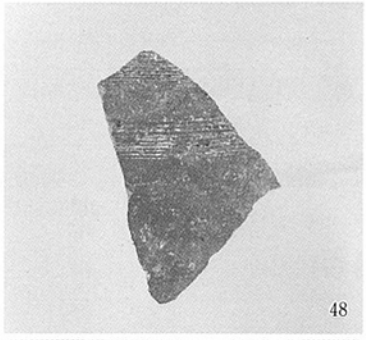
図版第12

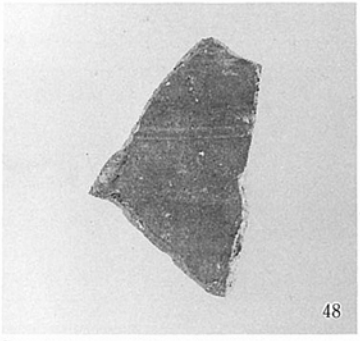


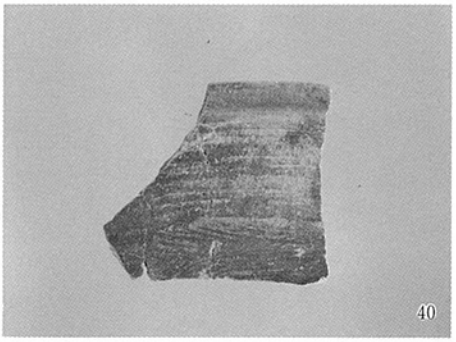
出土遺物②

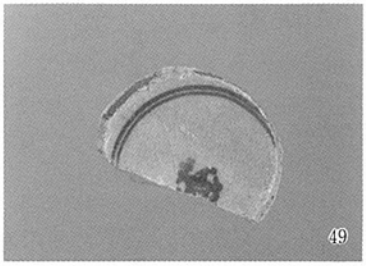


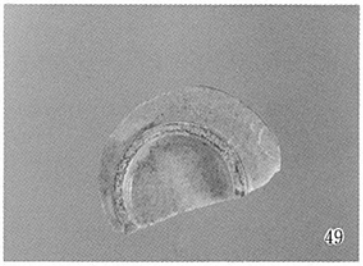


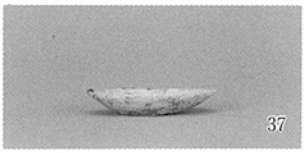


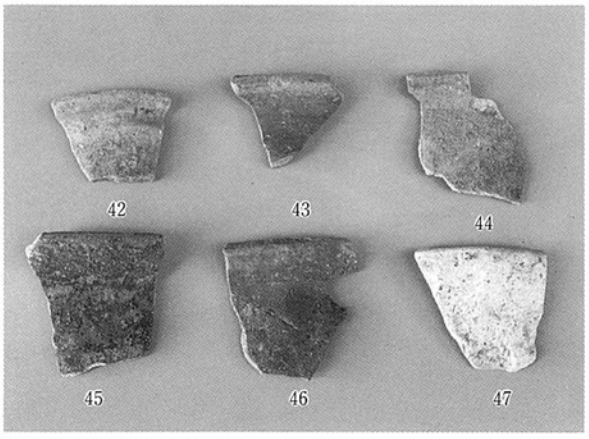


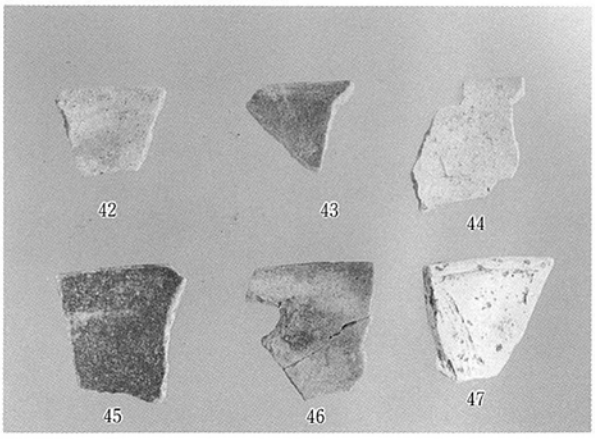












出土遺物③

報告書抄録

ふ り が な	れいぜいけきたいせき
書　　名	冷泉家北遺跡
副 書 名	平成８年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻　　次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第184集
編集著者名	岩崎　仁志　田中　敏夫　西田　宏
編 集 機 関	山口県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒753 山口県山口市春日町3-22　TEL　0839-23-1060
発行年月日	西暦1997年３月21日　（平成９年３年21日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
冷泉家北遺跡（れいぜいけきたいせき）	玖珂郡周東町（くがぐんしゅうとうちょう） 大字祖生（おおあざそお）	35325		34°02′50″	132°07′33″	19960917 ～ 19961226	3,000	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
冷泉家北遺跡	集落跡	中　　世	掘立柱建物跡 6棟 土坑 53基 溝状遺構 29条 柱穴 914個	土師器　瓦質土器 陶器　スラグ	溝に囲まれた建物跡を検出

山口県埋蔵文化財調査報告　第184集

冷泉家北遺跡

— 平成８年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告 —

１９９７年

編　集　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町２１３０）
山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町３－２２）

発　行　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町２１３０）
山口県教育委員会
（山口市滝町１－１）

印　刷　児玉印刷株式会社
（宇部市明神町３丁目４番３号）